

# ULVAC

## 株式会社 アルバック

アルバックレポートに関するお問い合わせ先  
株式会社 アルバック 経営企画室 広報・IR室  
〒253-8543 神奈川県茅ヶ崎市萩園2500番地  
TEL.0467-89-2033 FAX.0467-89-2250  
[www.ulvac.co.jp](http://www.ulvac.co.jp)

## 環境への配慮



有機物質を含んだ廃液が少ない、  
水なし印刷方式を採用しています。

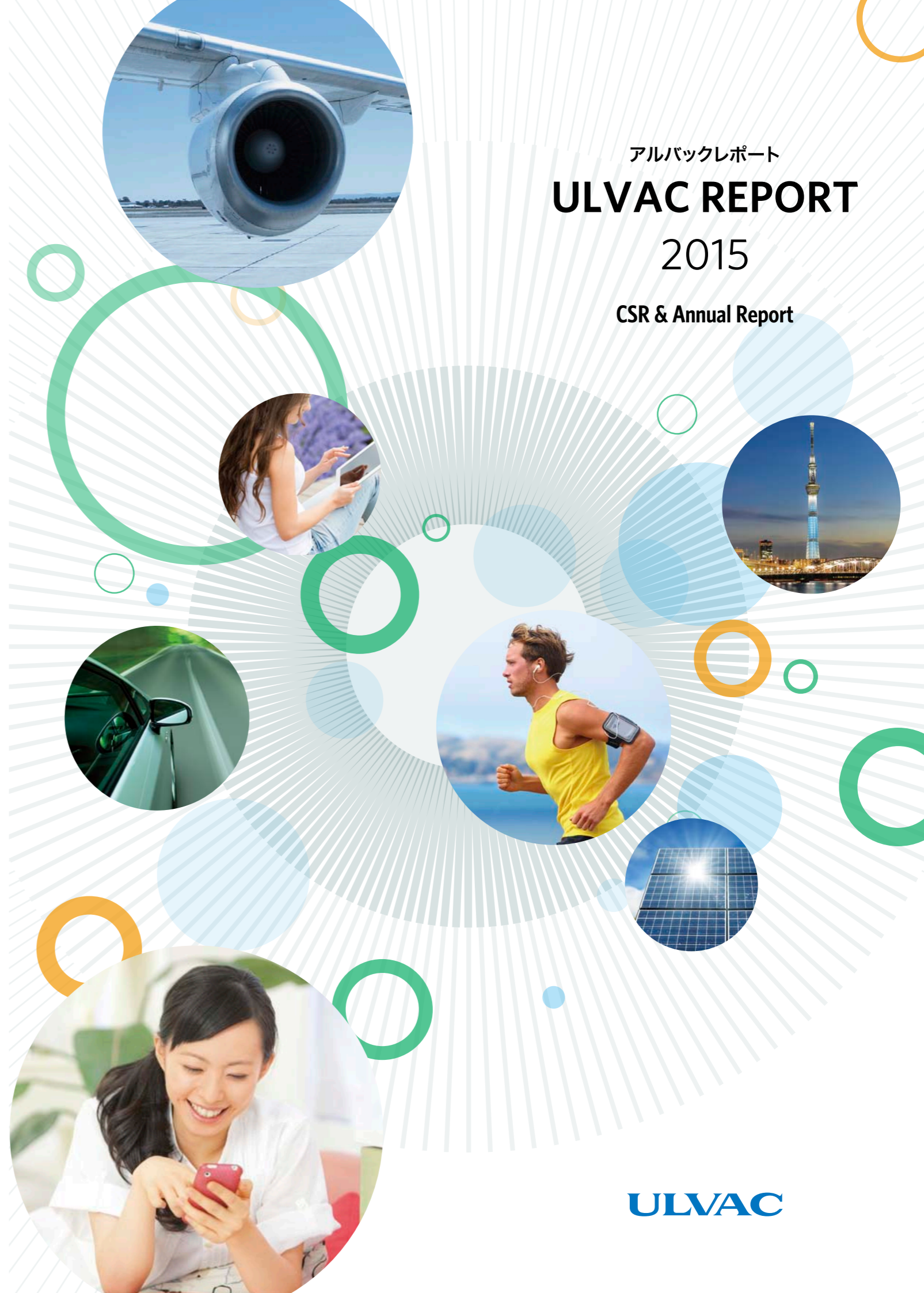


VOC (揮発性有機化合物)  
成分ゼロの環境に配慮した  
100%植物油インクを使用  
しています。



この印刷物は適切に管理  
された森林からの原料を含む  
FSC® 認証紙を使用しています。

アルバックレポート  
**ULVAC REPORT**  
2015  
CSR & Annual Report



# ULVAC

## 経営基本理念

アルバックグループは、互いに協力・連携し、  
真空技術及びその周辺技術を総合利用することにより、  
産業と科学の発展に貢献することを目指す。

## 経営方針

- 顧客満足度の増進 ●自由闊達な組織
- 生産技術の革新 ●企業価値の向上
- 独創的な商品開発



## アルバックグループの概要

- 商号 株式会社アルバック ULVAC, Inc.
- 商標 ULVAC
- 本社 神奈川県茅ヶ崎市秋園2500番地
- 設立 1952年8月23日
- 資本金 208億7,304万2,500円
- 社員数 1,097人(連結5,904人)(2015年6月30日現在)
- 事業内容 ディスプレイ・太陽電池・半導体・電子・電気・金属・機械・自動車・化学・食品・医薬品業界及び大学・研究所向け真空装置、周辺機器、真空コンポーネント、材料の開発・製造・販売・カスタマーズサポート及び諸機械の輸出入。また、真空技術全般に関する研究指導・技術顧問。

## アルバックグループの事業内容

### 真空機器事業

#### FPD及びPV製造装置

- 液晶ディスプレイ製造装置
- 有機EL製造装置
- インクジェットプリンティング装置
- 真空巻取(蒸着・スパッタリング)装置
- 太陽電池製造装置(結晶系・化合物系)

#### 半導体及び電子部品製造装置

- 半導体(メモリー、ロジック、パワー半導体など)製造装置
- LED製造装置
- 電子部品製造装置

#### コンポーネント

- 真空ポンプ ●真空計
- ヘリウムリークディテクタ
- プロセスガスモニタ
- 分光エリプソメータ
- EB・RF・DC電源
- 真空バルブ ●成膜コントローラ
- 真空ロケット

#### 一般産業用装置

- 真空熱処理炉 ●真空溶解炉
- 真空ろう付炉
- 希土類永久磁石生産装置
- 凍結真空乾燥装置 ●高真空蒸留装置
- 漏れ試験装置

### 真空応用事業

#### 材料

- スパッタリングターゲット材料
- 高融点活性金属材料及び部品製作
- ナノメタルインク
- その他
- 表面分析装置 ●制御装置
- マスクブランクス

## 編集方針

「アニュアルレポート」と「CSRレポート」を統合し、「アルバックレポート」として3年前に一新しました。アルバックグループの業績に加えて、CSR活動の取り組みをステークホルダーの皆様にご理解いただくとともに、コミュニケーションを促進していく重要なツールと位置付け発行しています。

### ■発行:

2015年12月  
(前回発行2014年9月)

### ■参考にしたガイドライン:

ISO26000:2010  
(Guidance on social responsibility) 第1版

## 対象範囲と期間

### 【対象範囲】

#### ■アルバックグループ

アルバックグループを対象としていますが、一部対象範囲が異なる箇所は、その旨を明記しています。

### 【対象期間】

■2015年6月期  
(2014年7月1日～

2015年6月30日)

一部この期間外の情報が含まれている箇所は、その旨を明記しています。

### 〈免責事項〉

本レポートに記載されている表やグラフの数値は、四捨五入して表記しているため、合計値と異なる場合があります。また、対象範囲の拡大や算出方法の見直しに伴い、一部過年度データを修正している箇所があります。

## CONTENTS

アルバックグループについて／編集方針	1
アルバックグループの歩み	3
トップインタビュー	5
アルバックグループの価値創造フロー	9

## 財務ハイライト

財務ハイライト	11
営業の概況	13
連結財務諸表	15

## Technology Topics / 特集

### スマートフォンからIoTへ

IoTにも活かされるアルバックの真空技術	19
スマートフォンの進化を支えるアルバックの真空技術	21

## アルバックグループの強み

研究開発	23
グローバルネットワーク	25
カスタマーサポート	26

## 価値創造を支える基盤

品質保証・製品安全	27
調達(サプライチェーンマネジメント)	28
人材マネジメント	29
ものづくりを支える健康づくり	31
労働安全衛生	32
環境	33

## 座談会

### さらなる成長フェーズへ

「活性化」から「一体化」に向けた生産面での取り組み	35
グローバル生産	38
社会貢献活動	39
コーポレート・ガバナンス	40
役員一覧	41
コンプライアンス	43
リスクマネジメント	44
CSRの活動実績と目標一覧	45

# アルバック グループ の歩み

## 60年以上にわたって 受け継がれるアルバックの遺伝子

真空技術は、今やあらゆる産業において、なくてはならない存在となっています。アルバックは世界で唯一の真空総合メーカーとして、産業界や研究機関などに製品を提供しています。

「真空技術で日本の産業に貢献しよう」という志を持って集まった若い研究者たちのDNAは、今日まで受け継がれ、アルバックは60年以上にわたって世界に向けて最新の技術を提供し続けています。

### アルバックの設立物語 — 6人のエンジェル※とアルバック —

※ベンチャー企業に投資し、助言・指導を行って育てる個人投資家のこと。

アルバックが創業した1952年は、真空が産業貢献をするどころか、日本は戦後復興に乗り出そうという時代で、真空が事業になることさえ考えも及ばない時代でした。

そのような時代において、アルバックは松下電器産業(現パナソニック)創業の祖、経営の神様といわれた松下幸之助を筆頭に、6人のエンジェルに恵まれ設立されました。

「日本に真空技術を根付かせ産業に貢献しよう」と集まった井街仁、林主税、柴田英夫ら若い研究者たちの熱い情熱に心を動かされた6人のエンジェルが出資して誕生したのがアルバック(当時は日本真空技術株式会社)でした。



石川 芳次郎  
京福電鉄社長、当社初代社長



弘世 現  
日本生命社長



松下 幸之助  
松下電器産業社長



大澤 善夫  
大沢商会会長



藤山 愛一郎  
日本商工会議所会頭



山本 為三郎  
朝日麦酒社長

1952

1952~

- 1952 ●日本真空技術株式会社設立
- 白光舎(現市光工業(株))から自動車部品のメッキ用真空蒸着装置を初受注
- 1955 ●大森工場を開設、国産装置の製造に着手
- 1956 ●東洋精機真空研究所との合併(1956年)、徳田製作所からの技術者の移籍(1959年)により真空総合メーカーとして事業を拡充
- 1959 ●横浜工場を開設

1960~

- 1960 ●真空溶解炉や真空蒸留装置など重厚長大産業向け大型真空装置を次々と開発
- 1964 ●アルバック初の海外現地法人を香港に設立
- 1968 ●茅ヶ崎本社・工場完成

1970~

- 1972 ●アルバック初の本格的な研究機関として超材料研究所を開設
- 1975 ●IBMより世界初全自動真空蒸着装置「システム731」受注



1980~

- 1986 ●世界初のマルチチャンバー型スパッタリング装置「MCHシリーズ」が多くの半導体メーカーから好評を博す



- 1988 ●ハードディスク向け製造装置「SHDシリーズ」が世界的にヒット

### 極限に挑戦する「ULVAC」マークの由来

1963

「ULVAC」商標制定にあたり「ULVAC」マークを発表する林主税専務



1960年代、アルバックの自社開発製品が日本の産業界に少しずつ貢献し始めると、真空技術にはますます高度な技術が求められるようになりました。

“真空”が果たすべき大きな使命を明確化するために、1963年にできたのが「ULVAC」という商標でした。「ULVAC」とは“ULtimate in VACuum(真空の極限を追求)”からなる造語です。

1969年には、日本真空技術の英文社名をULVAC Corporation(現在はULVAC, Inc.)とし、「ULVAC」ブランド名が認知されるようになった。2001年には「アルバック」に日本語社名も変更しました。

1990~

- 1990 ●半導体製造装置の専門工場として富士裾野工場を開設
- 1992 ●FPD(フラットパネルディスプレイ)事業の礎となったLCD用枚葉式成膜装置「SMDシリーズ」をリリース



- 1995 ●中国に真空ポンプの生産拠点、韓国に販売・サービス拠点を設立

2000~

- 2001 ●半導体電子技術研究所を開設
- 社名を株式会社アルバック(英文名 ULVAC, Inc.)に変更
- 2004 ●大型液晶ディスプレイ製造装置の開発・試作向け茅ヶ崎本社・工場新社屋完成



- 東京証券取引所市場第一部上場
- 中国蘇州に本格的な真空装置の生産拠点を設立

2005~

- 2005 ●韓国に大型液晶ディスプレイ製造装置の大規模生産拠点を設立
- 2006 ●台湾に大型液晶ディスプレイ製造装置の生産子会社を設立
- 2007 ●材料の開発・製造を担う千葉富里工場を開設
- 薄膜太陽電池一貫製造ラインを受注
- 2008 ●ポストFPD事業として、希土類磁石の大量生産装置「Magrise(マガライズ)」や「薄膜リチウム二次電池一貫量産技術」を開発

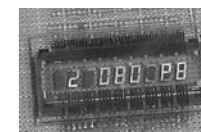
2010~

- 2011 ●韓国に韓国超材料研究所を設立
- 2012 ●創立60周年を迎える
- 2015 ●未来技術研究所を設立

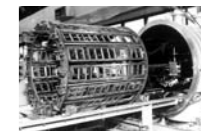
### 世界初、液晶表示とアルバック

1973

世界初電卓の液晶表示画面



液晶ディスプレイ開発に貢献した透明導電膜成膜装置



卓上式電気計算機(電卓)は日本が育てた世界的ヒット商品の一つで、日本国内に半導体や液晶ディスプレイの最先端製造技術を根付かせた点で、実に絶大な功績も残しました。

1973年、アルバックは、シャープの大ヒット商品、液晶表示電卓「エルシーメイトEL-805」の製造プロセスのキーとなる透明導電膜の試作と生産装置を完成させました。この経験を活かして液晶薄型テレビ用の表示素子製造装置で世界トップシェアを占めることになりました。

### 記録媒体の進化を支える真空技術

1983

高機能電子部品など応用分野を広げる巻取式真空成膜装置



1983年に開発された、高性能8ミリビデオテープの製造工程にアルバックの巻取式真空蒸着装置が大きく貢献しました。

アルバックの真空技術の歴史は、ビデオテープからフロッピーディスク、ハードディスク、光磁気ディスク、カード式メモリーまで、いずれの分野にも関わっており、そうした記録媒体を利用する磁気ヘッドや光読み取りセンサーなどの周辺機器まで広がれば、実に幅広い分野で貢献しています。





## トップインタビュー

新しい価値の創造に  
果敢に挑戦すべく  
グループ一体化経営を推進し、  
産業と科学の進化、  
そして社会の持続的発展に  
貢献していきます

代表取締役執行役員社長

小日向久治

## 2015年6月期の振り返り

Q1 当連結会計年度(2015年6月期)の事業環境及び業績についてお聞かせください。

### A1 計画を上回る利益を達成しました。

当社グループを取り巻くエレクトロニクス市場においては、引き続きスマートフォンが市場を牽引し、それらに搭載される中小型の液晶パネルや半導体、電子部品の出荷が増加しました。液晶ディスプレイ製造装置の設備投資については、期初は各社の投資一巡による一服感が見られ、総じて低調に推移し

業績の推移 単位:億円

	(参考) 14/6期	15/6期		前期比
		計画*	実績	
受注高	1,698	1,700	1,827	129 [+7.6%]
期末受注残高	672	622	730	
売上高	1,739	1,750	1,792	53 [+3.0%]
営業利益	120	90	111	△9 [△7.2%]
率	6.9%	5.1%	6.2%	
経常利益	134	85	125	△9 [△6.8%]
率	7.7%	4.9%	7.0%	
当期純利益	115	65	89	△27 [△23.1%]

※2014年8月公表値

ましたが、後半に投資を再開する動きが出て回復してきました。自動車市場においては、引き続きエコカーなどの販売が好調なことから、カーエレクトロニクス製品をはじめ自動車部品向けの設備投資が堅調に推移しました。

このような事業環境の中、2015年6月期の連結業績は、受注高が1,827億円(前期比7.6%増)、売上高が1,792億円(前期比3.0%増)と、いずれも前年度比増加となりました。損益については、営業利益は111億円(前期比7.2%減)、経常利益は125億円(前期比6.8%減)、当期純利益は89億円(前期比23.1%減)と、前期比減少したものの、いずれも当初計画を上回る結果となりました。

Q2 当連結会計年度(2015年6月期)の成果を、どのように評価されていますか。

### A2 「フロントローディング」の徹底で、着実に利益を創出する力が高まってきました。

2012年の社長就任から3年、これまでグループ丸となって取り組んできた事業構造改革により、厳しい事業環境の中でも計画を達成し、着実に利益を創出する力が高まってきたと手応えを掴んでおります。その要因としては、①現状の経営状

態を掴む仕組みがしっかりと整備され、万一変動があれば即座に適応することができるようになってきたこと、②計画通りの利益を創出するためのものづくりの体制が構築できたことがあげられます。これは、当社グループが保有する過去のデータや技術仕様など、これまでに培った英知を結集し、仕事の初期段階で徹底的に対策を講じてトラブルのない安定したものづくりを実現する「フロントローディング」を確立した成果でもあります。これにより、計画に沿った利益を創出できるようになったと考えます。

Q3 財務体質健全化の状況はいかがですか。

### A3 優先株式を全額償還しました。

当社は、2012年9月に150億円のA種種類株式を発行し、事業構造改革を鋭意推進してきました。その結果、連結純資産の増加、手元現金の増加、有利子負債の減少など財務体質の相応の改善が図られ、2014年11月に一部(元本50億円)を取得・消却しました。そして、2015年7月には残存するA種種類株式の全部(元本100億円)についても、取得・消却することができました。

## 2016年6月期の見通しと中期経営計画の進捗

Q4 2016年6月期の見通しについてお聞かせください。

### A4 受注高と売上高は中期経営計画通り、利益は上回る予想です。

中期経営計画の2期目にあたる2016年6月期は、受注高は1,900億円、売上高も1,900億円と中期経営計画通りを見込んでいます。一方、利益については、営業利益は145億円(中期経営計画130億円)、経常利益は130億円(同120億円)、親会社に帰属する当期純利益は100億円(同90億円)と中期経営計画を上回ると見込んでいます(2015年11月11日に利益の上方修正を行っています)。

## 中期経営計画の進捗

単位:億円

	15/6期 実績	16/6期 予想 <sup>※2</sup>	17/6期 目標
受注高	1,827	1,900	2,000
売上高	1,792	1,900	2,000
営業利益	111	145	160
率	6.2%	7.6%	8.0%
経常利益	125	130	150
率	7.0%	6.8%	7.5%
当期純利益 <sup>※1</sup>	89	100	110

※1:16/6期・17/6期については、親会社株主に帰属する当期純利益  
※2:2015年11月11日修正公表値

Q5 中期経営計画の今後の取り組みについてお聞かせください。

### A5 事業構造改革プロジェクトをさらに推し進めていきます。

2014年8月に策定した中期経営計画の実現に向け、「価値創造型ビジネスモデルの再構築(真空技術を核とした付加価値を高める仕組みの再構築)」、「不採算事業の見直し」、「損益分岐点売上高の引下げ」を基本方針として、引き続き「確実・安定的に収益確保できる体制の確立」をめざします。事業領域については、「FPD及びPV製造装置」「一般産業用装置」「コンポーネント」が継続的に下支えする中、「半導体及び電子部品製造装置」が成長を牽引していくシナリオを堅持し、開発・営業・生産セクションの連携による製品競争力・収益力を高める活動を「事業構造改革プロジェクト」のもと、さらに推し進めていきます。

#### 営業戦略プロジェクト

- 営業本部の強化
- 新規技術で先行する世界のリーディングカンパニーとのパートナーシップを確立、市場開拓を進める

#### 開発戦略プロジェクト

- 8つの重要領域に、IoTを支える「電子部品・MEMS」を追加
- 長期的成長に資する未来技術研究所を設立

#### コスト管理強化プロジェクト

- フロントローディングの定着とグローバル展開
- グループ生産の効率化を徹底

Q6 各プロジェクトについて、また、プロジェクトを着実に実行するためのポイントについてお聞かせください。

## A6 グループ一体化経営により最大限の効率を追求し、成果を着実に上げていきます。

まず営業戦略プロジェクトにおいては、アルバック本社の営業本部をさらに強化していきます。現在、お客様の生産活動はグローバルに広がっています。そうした動きに対応するために、アルバック本社の営業本部を核にグループ内の営業活動の協調と最適化を図り、グローバルな受注獲得に向けたアプローチをより効果的に進めております。そして、新規技術で先行する世界のリーディングカンパニーとのパートナーシップの確立に向けて、テクニカルロードマップミーティングを継続的に開けるような関係を数多く構築しながら、将来の技術動向を正確に捉えていきたいと考えています。

開発戦略プロジェクトについては、当社グループが注力すべき開発分野として設定した8つの重要領域に、新たに高度情報化社会(IoT)を支える「電子部品・MEMS」を加え、9つの重要領域で開発を推進します。また、10年・20年後のアルバックのために未来技術研究所も創設しました。ここ数年の開発は、足元の受注計画などを重要視してきましたが、社会の発展や当社グループの将来の成長に資する夢のある開発については、中期的な視点から積極的に取り上げていきます。

コスト管理強化プロジェクトについては、これまでに取り組んできた「フロントローディング」をさらに強化し定着させるとともに、グローバルに展開していきます。また、グループ生産の効率化も徹底的に進めていきます。

そして、これらのプロジェクトを着実に推進し、当社グループのさらなる成長を確実なものとするために、「一体化」をキーワードにした効率的経営へと舵を切っています。これまでは、「活性化」をキーワードに「事業構造改革プロジェクト」を推進してきました。これにより、開発・営業・生産セクションのグローバルな活性化が進み、製品競争力や収益力などが高まってきました。今後はそれを一つの方向にまとめ、グループとして最大限の効率を追求し、成果を着実に上げるために「一体化経営」を推し進めてまいります。

## 株主還元について

Q7 配当についてのお考えをお聞かせください。

## A7 2015年6月期は1株当たり10円の配当とさせていただきます。

これまでグループ一丸となって取り組んできた事業構造改革により、確実・安定的に収益を確保できる体制が整ってきたこと、A種類株式の全額償還を実施したこと、普通株式における復配の目処がついたものと判断し、2015年6月期は1株当たり10円の配当を実施いたしました。また、2016年6月期につきましては、今後の研究開発投資や財務基盤の強化に必要な内部留保を確保しつつ、今後の業績予想や配当性向などを総合的に勘案し、配当は20円増配し30円を予想しております。



## アルバックの使命と価値創造

Q8 アルバックの使命について、どのようにお考えでしょうか。

## A8 最先端の技術を研究開発し、社会に貢献すること。

企業は社会の公器と言いますが、私たちは社会に生かされているということ認識した上で、社会に有用な会社であることがまず前提になると考えます。そして、すべてのステークホルダーに対してしっかりと責任を果たし、当社グループの強みである最先端の技術をもって、社会に貢献することが最大の使命であると考えています。

当社は1952年の創業以来、「真空技術で産業と科学に貢献する」という企業理念のもと、真空が持つ無限の可能性を追求し、真空を自由に操る技術を研鑽し、時代が求める新しい価値の創造に果敢に挑戦してきました。そして、私たちがこれまで創造してきた真空技術の応用分野は、半導体、電子部品、薄型テレビ、太陽電池、自動車、医薬・食品・科学など多岐にわたり、多くの産業分野と科学の発展に必要な不可欠な基盤技術となっています。

近年、地球環境問題をはじめ複雑に連関した社会的な課題が顕在化していますが、当社グループの製品や技術が貢献できる分野は加速度的に広がっていると考えています。

Q9 具体的に今後どういった分野で社会に貢献していこうとお考えでしょうか。

## A9 エネルギーとIoT分野で社会に貢献していきます。

さまざまな課題の中でも、当社グループとしては大きく二つの分野で貢献していこうと考えています。一つは深刻化する社会問題への技術解決として省エネルギー及び創エネルギー分野での貢献です。今後の人口増加に伴いエネルギーの枯渇が懸念される中、パワーデバイス・高輝度LED・高効率太陽電池・自動車関連の4プロジェクトで、社会が直面するエ

ネルギー危機を回避するための技術を先行して開発していきます。二つ目は、社会が成長・発展するためのキーテクノロジー分野での貢献です。IoTという言葉に代表される高度情報化社会に向けて、ディスプレイ関連・不揮発性メモリー・超微細配線・高密度実装の4プロジェクトに必要な技術開発に注力していきます。合わせて九つ目のプロジェクトとして、「電子部品・MEMSプロジェクト」も加えました。IoTの時代を支える通信デバイス・センサーなどをつくる上では、「MEMS技術」が非常に重要になります。当社グループには関連する先進的なプロセス技術を保有しており、特に力を入れていこうと考えています。この2つを当社グループの重要な分野として定め、世界中の人々の豊かで安全な暮らしの実現に向けて技術開発を積極的に進めていきます。(P.23参照)

Q10 最後にアルバックのめざす姿についてお聞かせください。

## A10 時代が求める新しい価値を創造し、あらゆる産業、そして社会から必要とされる企業グループをめざします。

私は企業経営を、安全・品質・利益という順番で捉えています。安全・品質無くして利益無し。利益のみを追求し、安全や品質を疎かにしては、どこかで事故につながり社会に迷惑をかけてしまいます。また、品質を疎かにすればお客様からの信用を失ってしまいます。まずは安全と品質、ここがしっかりできて、初めて利益を追求することができる。それが企業経営だと考えています。

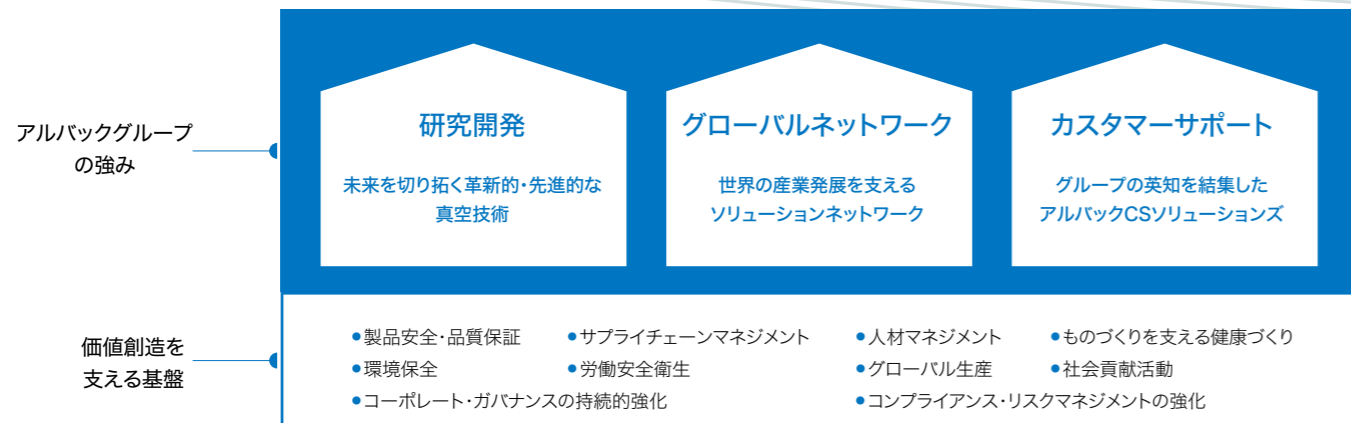
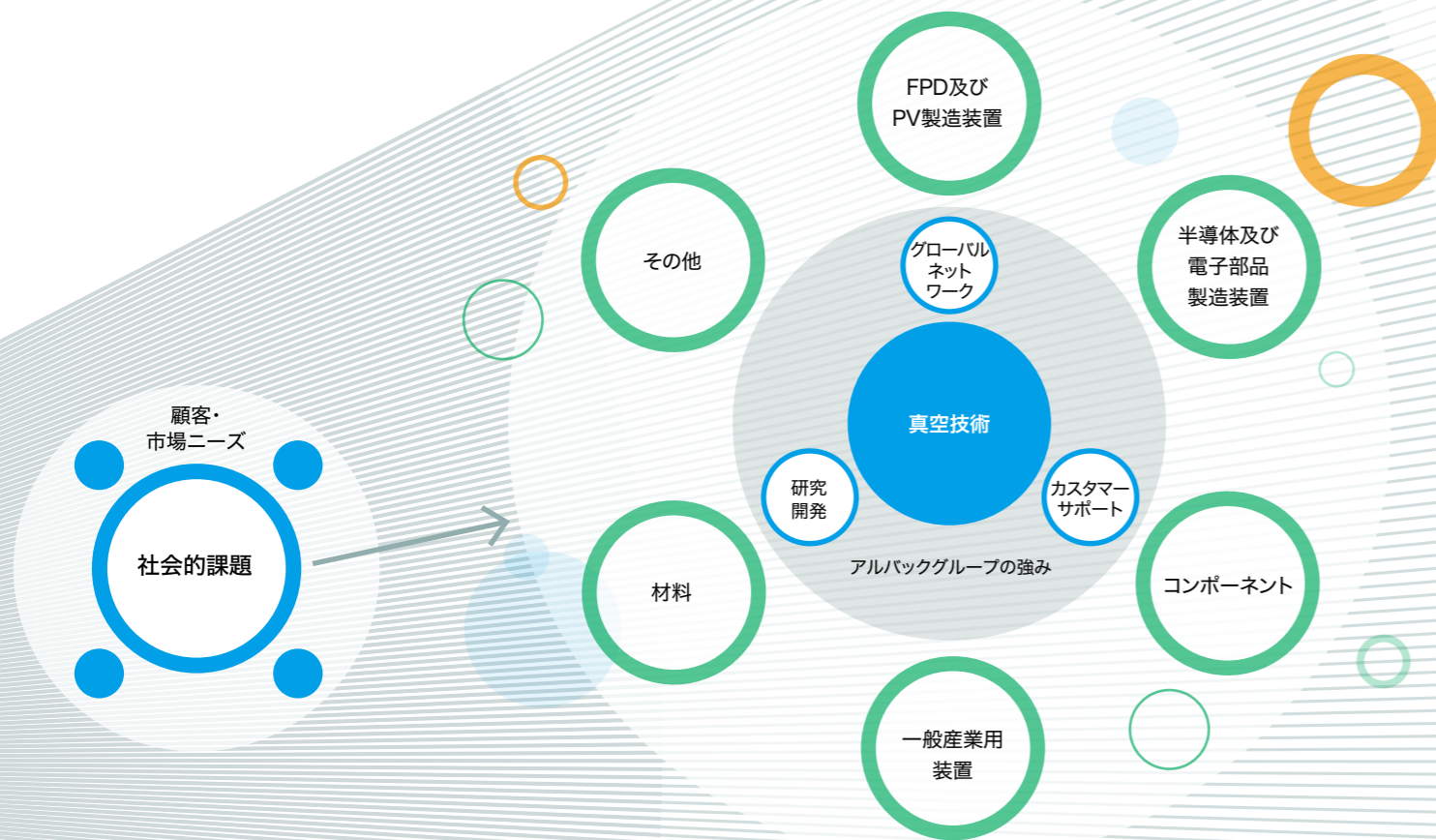
私は、安全と品質を第一に考える企業風土を着実に根付かせ、ものづくりの力とそれを支える人財の力を結集することで、時代が求める新しい価値を創造し、あらゆる産業、そして社会から必要とされる企業グループをめざします。そのためにも、お客様をはじめとするすべてのステークホルダーの皆様との関係構築をより強固なものとし、安定した企業体質を築き上げることで事業を持続的に発展させ、企業価値を継続的に向上させていきます。アルバックが創り出す明るい未来にご期待いただき、引き続き一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## アルバックグループの価値創造フロー

### 製品・技術の提供を通じて社会的課題を解決し、 社会の発展に貢献していきます

アルバックは創業以来、真空が持つ無限の可能性を追求し、真空を自由に操る技術を研鑽し、時代が求める新しい価値の創造に果敢に挑戦してきました。

アルバックは、3つの強みである「研究開発」、「グローバルネットワーク」、「カスタマーサポート」で顧客や市場のニーズを把握し、社会的課題の解決に寄与する製品・技術を提供していきます。そして、社会から必要とされる存在として、事業を持続的に発展させ、企業価値を継続的に向上させることで、より社会の発展に貢献していきます。



多くの産業へ製品・技術を提供

・ステークホルダーからの信頼の獲得  
・企業価値の向上

アルバックグループと社会の持続可能な発展

## 財務ハイライト

単位:百万円

会計年度	2011年6月	2012年6月	2013年6月	2014年6月	2015年6月
受注高	235,932	152,221	166,778	169,808	182,732
売上高	232,040	196,804	163,351	173,878	179,174
営業利益(損失)	1,850	(6,384)	6,115	11,996	11,132
税金等調整前当期純利益(損失)	(9,192)	(33,704)	(565)	15,137	12,654
当期純利益(損失)	(8,706)	(49,984)	(3,807)	11,538	8,874
設備投資額	17,827	12,719	6,761	6,217	6,731
減価償却費	10,717	9,096	7,967	7,421	7,630
研究開発費	8,255	7,088	4,989	5,213	5,562

単位:百万円

会計年度末	2011年6月	2012年6月	2013年6月	2014年6月	2015年6月
総資産	313,616	249,651	243,289	230,791	242,348
純資産	92,023	41,187	59,436	72,238	84,928
従業員数(人)	7,878	6,981	6,579	5,971	5,904

単位:円

1株当たり情報	2011年6月	2012年6月	2013年6月	2014年6月	2015年6月
純資産	1,787.51	751.00	806.38	1,040.23	1,398.66
当期純利益(損失)	(176.43)	(1,012.94)	(87.79)	223.18	172.73
潜在株式調整後当期純利益	—	—	—	165.62	148.48
配当金(普通株式)	—	—	—	—	10.00

単位:%

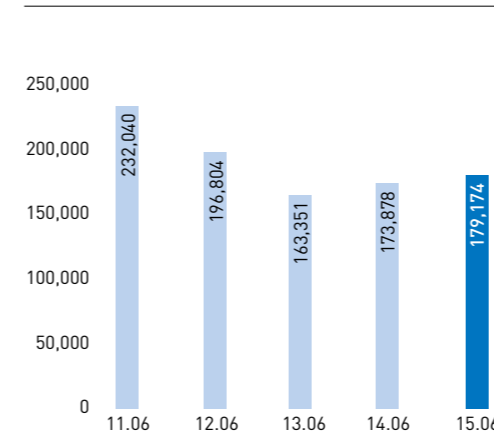
その他情報	2011年6月	2012年6月	2013年6月	2014年6月	2015年6月
総資産当期純利益率(ROA)	—	—	—	4.9	3.8
自己資本当期純利益率(ROE)	—	—	—	18.8	12.1
自己資本比率	28.1	14.8	22.7	29.2	32.8

### 将来の見通しに関する記述についての注意事項

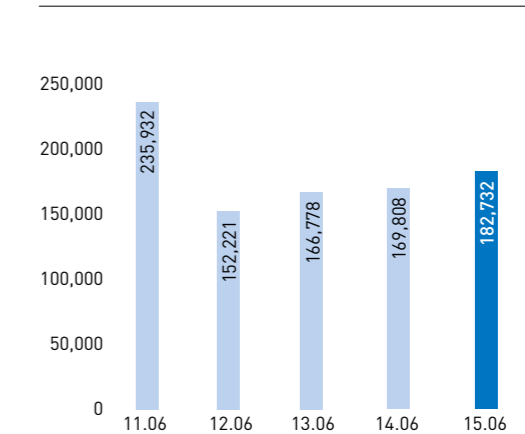
このレポートで述べられている将来の当社に関する見通しは、現時点で知りうる情報をもとに作成されたものです。当社グループのお客様であるフラットパネルディスプレイ(FPD)・半導体・太陽電池・電子部品などの業界は技術革新のスピードが大変速く、競争の激しい業界です。

また、世界経済、為替レートの変動、FPD・半導体・電子部品・原材料などの市況、設備投資の動向など、当社グループの業績に直接的・間接的に影響を与えるさまざまな外部要因があります。したがって、実際の売上高及び利益は、このレポートに記載されている予想数値とは大きく異なる可能性があることをご承知おきください。

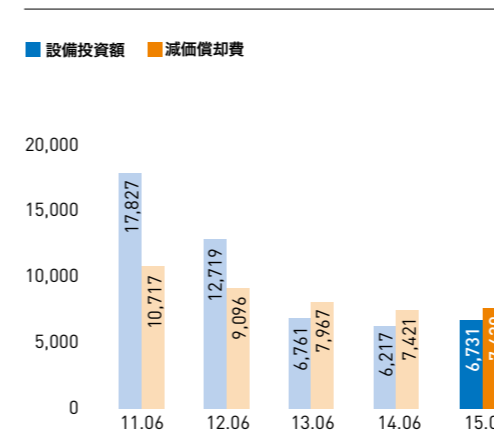
売上高(百万円)



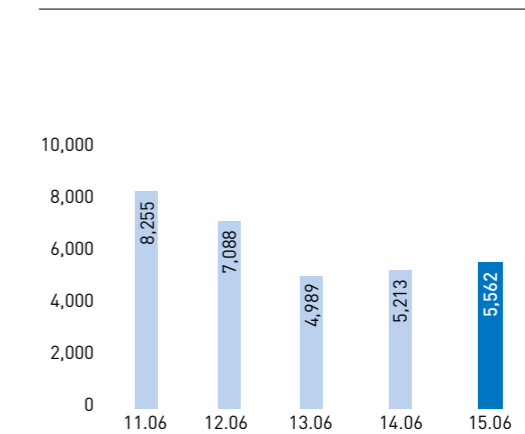
受注高(百万円)



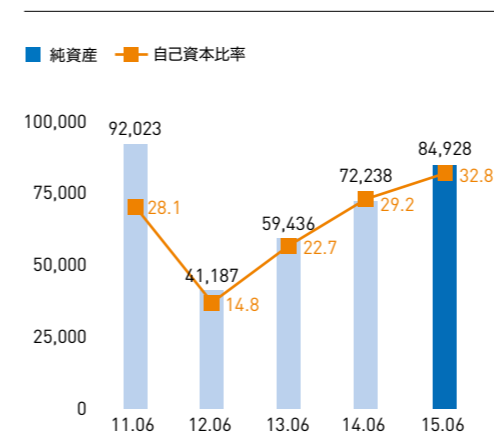
設備投資額/減価償却費(百万円)



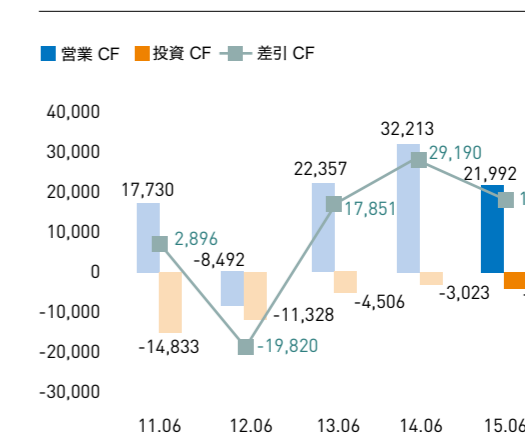
研究開発費(百万円)



純資産(百万円)/自己資本比率(%)



キャッシュ・フロー(百万円)



## 営業の概況

### 経営成績

当連結会計年度におけるわが国経済は、雇用や所得環境の改善傾向が続く中、個人消費は底堅い動きを見せ、企業収益も改善に向かうなど緩やかな回復が続いてきました。米国では、設備投資に弱さが見られるものの個人消費が増加するなど景気の回復が続いてきました。欧州では、ギリシャ問題や失業率、物価の動向などに留意する必要があるものの、景気は持ち直しの動きが続いてきました。中国では、個人消費や生産の伸びが低下するなど、景気は緩やかに減速してきました。

当社グループを取り巻くエレクトロニクス市場においては、引き続きスマートフォンが市場を牽引し、それらに搭載される中小型の液晶パネルや半導体、電子部品の出荷が増加しました。

液晶ディスプレイ製造装置の設備投資については、期の前

半は各社の投資一巡による一服感が見られ、総じて低調に推移しましたが、後半には投資を再開する動きが出て、回復してきました。自動車市場においては、引き続きエコカーなどの販売が好調なことから、カーエレクトロニクス製品をはじめ自動車部品向けの設備投資が堅調に推移しました。

その結果、当連結会計年度については、受注高は、1,827億32百万円(前年同期比129億24百万円(7.6%)増)となり、売上高は1,791億74百万円(同52億96百万円(3.0%)増)となりました。また、損益面では、営業利益は111億32百万円(同8億63百万円(7.2%)減)、経常利益は124億75百万円(同9億8百万円(6.8%)減)、当期純利益は88億74百万円(同26億64百万円(23.1%)減)となりました。

### 真空機器事業

#### ■ FPD及びPV製造装置

大型液晶ディスプレイ製造装置や有機EL製造装置に加え、期の後半には中小型液晶ディスプレイ製造装置の受注高が増加しました。

#### ■ 半導体及び電子部品製造装置

半導体関連は、モバイルDRAM、NANDフラッシュメモリー用スパッタリング装置や自然酸化膜除去装置が、電子部品関連は、モバイル機器向け高性能デバイス製造装置やLED製造装置がそれぞれ寄与し、受注高、売上高ともに前年同期を上回りました。

### 真空応用事業

#### ■ 材料

主に日本、韓国などの主要パネルメーカーから液晶ディスプレイ用スパッタリングターゲットを受注し、前年同期を上回る受注高、売上高を計上しました。

#### ■ コンポーネント

FPD、半導体、電子部品業界や自動車関連向けを中心に堅調に推移し、受注高、売上高とも前年同期を上回りました。

#### ■ 一般産業用装置

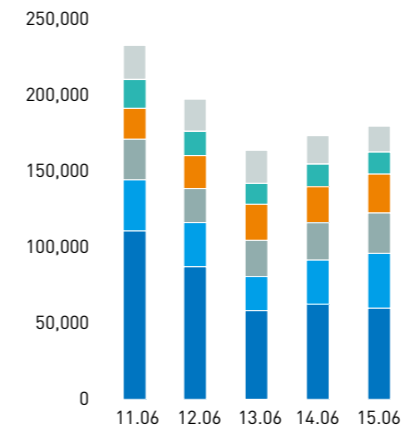
自動車部品製造用真空熱処理炉などを中心に、前年同期を上回る売上高を計上しました。

#### ■ その他

マスクブランクス関連は、スマートフォンやタブレット端末向け及び車載用の半導体向け需要の増加を受け、堅調に推移しました。

### 事業別売上高(百万円)

■ FPD及びPV製造装置 ■ 半導体及び電子部品製造装置 ■ コンポーネント  
■ 一般産業用装置 ■ 材料 ■ その他



#### 真空応用事業

315億33百万円(18%)

#### その他

171億11百万円(10%)

#### 材料

144億22百万円(8%)

#### 一般産業用装置

254億93百万円(14%)

#### コンポーネント

264億82百万円(15%)

#### 真空機器事業

1,476億41百万円(82%)

#### FPD及びPV製造装置

596億99百万円(33%)

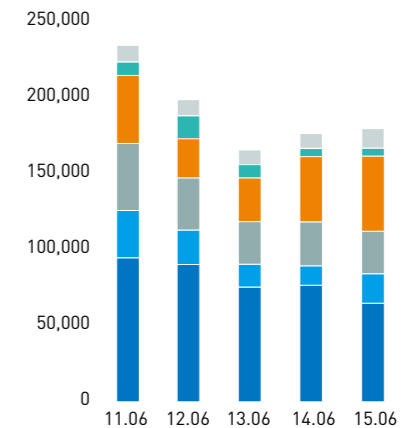
#### 半導体及び電子部品製造装置

359億67百万円(20%)

合計  
1,791億  
74百万円

### 地域別売上高(百万円)

■ 日本 ■ 台湾 ■ 韓国 ■ 中国 ■ その他アジア ■ 欧米・その他



#### 欧米・その他

130億14百万円(7%)

#### その他アジア

51億77百万円(3%)

#### 台湾

192億94百万円(11%)

#### 韓国

279億9百万円(16%)

#### 中国

492億57百万円(27%)

#### 海外

1,146億52百万円(64%)

合計  
1,791億  
74百万円

日本  
645億22百万円(36%)

中国  
492億57百万円(27%)

海外  
1,146億52百万円(64%)

### 株式の状況(2015年6月30日現在)

発行可能株式総数	普通株式	100,000,000株
	A種類株式	1,500株
	B種類株式	37,500株
発行済株式の総数	普通株式	49,355,938株
	A種類株式	1,000株
株主数	普通株式	13,542名
	A種類株式	1名

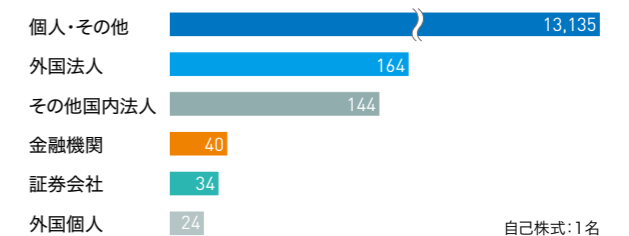
(注)2015年7月3日、A種類株式を取得・消却し、当社の株式は普通株式のみとなっています。

#### 大株主(普通株式)

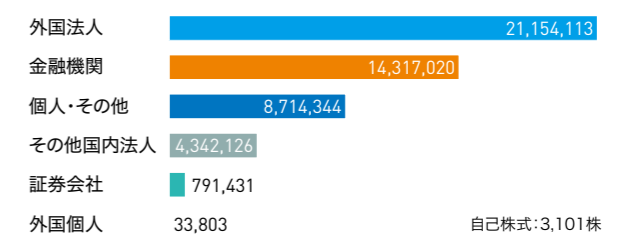
株主名	持株数(千株)	持株比率(%)
TAIYO FUND, L.P.	6,610	13.39
日本生命保険相互会社	3,242	6.57
株式会社みずほ銀行	1,916	3.88
株式会社三井住友銀行	1,864	3.78
ステートストリートバンクアンドトラストカンパニー505019	1,803	3.65
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	1,160	2.35
TAIYO HANEI FUND, L.P.	1,154	2.34
ゴールドマン・サックス・アンド・カンパニーレギュラーアカウント	1,026	2.08
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	939	1.90
ゴールドマンサックスインターナショナル	926	1.88

(注)持株比率は自己株式(3,101株)を控除して計算しています。

#### 所有者別株主数(普通株式) 合計:13,542名



#### 所有者別株式数(普通株式) 合計:49,355,938株





## 連結財務諸表

### 連結貸借対照表

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2014年6月30日)	当連結会計年度 (2015年6月30日)
<b>資産の部</b>		
<b>流動資産</b>		
現金及び預金	57,669	62,684
受取手形及び売掛金	46,341	56,684
商品及び製品	4,068	3,551
仕掛品	21,392	18,685
原材料及び貯蔵品	8,892	9,897
繰延税金資産	1,774	1,620
その他	6,006	5,264
貸倒引当金	△360	△482
<b>流動資産合計</b>	<b>145,783</b>	<b>157,903</b>
<b>固定資産</b>		
<b>有形固定資産</b>		
建物及び構築物	79,614	81,341
減価償却累計額	△41,103	△43,718
建物及び構築物(純額)	38,511	37,623
機械装置及び運搬具	64,464	67,281
減価償却累計額	△48,774	△51,787
機械装置及び運搬具(純額)	15,689	15,494
工具、器具及び備品	13,779	13,684
減価償却累計額	△12,393	△12,390
工具、器具及び備品(純額)	1,386	1,294
土地	8,476	8,198
リース資産	1,270	1,490
減価償却累計額	△757	△923
リース資産(純額)	514	567
建設仮勘定	2,325	2,487
<b>有形固定資産合計</b>	<b>66,901</b>	<b>65,662</b>
<b>無形固定資産</b>		
リース資産	181	166
ソフトウェア	1,120	1,023
その他	3,709	3,436
<b>無形固定資産合計</b>	<b>5,010</b>	<b>4,625</b>
<b>投資その他の資産</b>		
投資有価証券	4,130	4,718
差入保証金	1,936	1,877
繰延税金資産	2,384	1,766
その他	5,549	6,896
貸倒引当金	△901	△1,100
<b>投資その他の資産合計</b>	<b>13,097</b>	<b>14,156</b>
<b>固定資産合計</b>	<b>85,008</b>	<b>84,444</b>
<b>資産合計</b>	<b>230,791</b>	<b>242,348</b>

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2014年6月30日)	当連結会計年度 (2015年6月30日)
<b>負債の部</b>		
<b>流動負債</b>		
支払手形及び買掛金	28,700	33,816
短期借入金	69,242	62,844
リース債務	338	385
未払法人税等	1,473	1,392
前受金	9,785	14,492
繰延税金負債	51	52
賞与引当金	1,043	1,931
役員賞与引当金	245	203
製品保証引当金	1,593	2,059
受注損失引当金	581	129
その他	9,097	9,976
<b>流動負債合計</b>	<b>122,148</b>	<b>127,277</b>
<b>固定負債</b>		
長期借入金	20,364	19,805
リース債務	648	557
繰延税金負債	1,850	1,590
退職給付に係る負債	11,759	6,715
役員退職慰労引当金	720	394
資産除去債務	340	333
その他	723	747
<b>固定負債合計</b>	<b>36,404</b>	<b>30,142</b>
<b>負債合計</b>	<b>158,552</b>	<b>157,420</b>
<b>純資産の部</b>		
<b>株主資本</b>		
資本金	20,873	20,873
資本剰余金	37,100	16,435
利益剰余金	8,510	34,609
自己株式	△10	△10
<b>株主資本合計</b>	<b>66,474</b>	<b>71,908</b>
<b>その他の包括利益累計額</b>		
その他有価証券評価差額金	372	718
為替換算調整勘定	1,925	7,462
退職給付に係る調整累計額	△1,389	△718
その他の包括利益累計額合計	908	7,462
<b>少数株主持分</b>	<b>4,856</b>	<b>5,559</b>
<b>純資産合計</b>	<b>72,238</b>	<b>84,928</b>
<b>負債純資産合計</b>	<b>230,791</b>	<b>242,348</b>

連結損益計算書

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2013年7月1日 至 2014年6月30日)	当連結会計年度 (自 2014年7月1日 至 2015年6月30日)
売上高	173,878	179,174
売上原価	131,231	135,710
売上総利益	42,646	43,464
販売費及び一般管理費		
販売費	13,707	14,978
一般管理費	16,944	17,353
販売費及び一般管理費合計	30,651	32,331
営業利益	11,996	11,132
営業外収益		
受取利息	216	181
受取配当金	267	310
為替差益	765	743
受取保険金及び配当金	242	360
スクラップ売却益	1,100	1,143
持分法による投資利益	-	128
その他	1,110	954
営業外収益合計	3,699	3,818
営業外費用		
支払利息	1,257	1,038
シンジケートローン手数料	198	365
たな卸資産評価損	-	363
持分法による投資損失	109	-
その他	747	710
営業外費用合計	2,311	2,475
経常利益	13,384	12,475
特別利益		
固定資産売却益	1,068	326
関係会社株式売却益	838	28
受取保険金	535	-
その他	31	-
特別利益合計	2,471	354
特別損失		
固定資産除却損	145	176
災害による損失	279	-
事業構造改善費用	133	-
その他	161	-
特別損失合計	718	176
税金等調整前当期純利益	15,137	12,654
法人税、住民税及び事業税	2,805	3,183
法人税等調整額	3	13
法人税等合計	2,808	3,196
少数株主損益調整前当期純利益	12,329	9,458
少数株主利益	791	584
当期純利益	11,538	8,874

連結包括利益計算書

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2013年7月1日 至 2014年6月30日)	当連結会計年度 (自 2014年7月1日 至 2015年6月30日)
少数株主損益調整前当期純利益	12,329	9,458
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	40	346
為替換算調整勘定	2,086	5,999
退職給付に係る調整額	-	672
持分法適用会社に対する持分相当額	21	40
その他の包括利益合計	2,147	7,056
包括利益	14,475	16,514
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	13,515	15,427
少数株主に係る包括利益	960	1,087

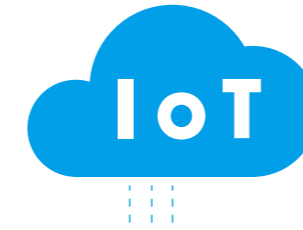
連結キャッシュ・フロー計算書

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2013年7月1日 至 2014年6月30日)	当連結会計年度 (自 2014年7月1日 至 2015年6月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	15,137	12,654
減価償却費	7,421	7,630
事業構造改善費用	133	-
貸倒引当金の増減額(△は減少)	626	271
賞与引当金の増減額(△は減少)	23	857
退職給付に係る負債の増減額(△は減少)	△661	△176
役員退職慰労引当金の増減額(△は減少)	83	△301
製品保証引当金の増減額(△は減少)	△209	348
受注損失引当金の増減額(△は減少)	△2,636	△458
受取利息及び受取配当金	△483	△491
支払利息	1,257	1,038
補助金収入	△219	△53
持分法による投資損益(△は益)	109	△128
売上債権の増減額(△は増加)	13,178	△7,626
たな卸資産の増減額(△は増加)	8,986	4,354
仕入債務の増減額(△は減少)	292	3,740
前受金の増減額(△は減少)	△4,345	3,344
未払消費税等の増減額(△は減少)	△100	297
その他	△4,068	1,103
小計	34,522	26,403
利息及び配当金の受取額	554	539
利息の支払額	△1,254	△1,043
法人税等の支払額	△1,609	△3,907
営業活動によるキャッシュ・フロー	32,213	21,992
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△898	△624
定期預金の払戻による収入	658	379
有形及び無形固定資産の取得による支出	△5,539	△5,846
有形及び無形固定資産の売却による収入	1,989	1,070
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の売却による収入	867	490
補助金による収入	360	207
その他	△461	269
投資活動によるキャッシュ・フロー	△3,023	△4,055
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額(△は減少)	△9,559	△3,972
長期借入れによる収入	7,769	7,525
長期借入金の返済による支出	△14,137	△10,893
リース債務の返済による支出	△668	△387
配当金の支払額	△0	△1,050
自己株式の取得による支出	-	△5,811
少数株主への配当金の支払額	△266	△287
その他	△20	△20
財務活動によるキャッシュ・フロー	△16,881	△14,895
現金及び現金同等物に係る換算差額	500	1,616
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	12,808	4,658
現金及び現金同等物の期首残高	44,204	57,012
現金及び現金同等物の期末残高	57,012	61,670



# The Internet of Things IoT



アルバックグループは、スマートフォンを支える技術のみならず、IoTの広がりにも貢献します。

高性能化とともに、需要拡大が進むスマートフォン。その背景には、最先端技術を支える真空技術の存在があります。それは同時に、世界で唯一の総合真空メーカーであるアルバックにとって新たな価値の創造への挑戦でもあります。

また、今後急速に拡大が予想されるIoT社会においては、スマートフォンとは比べ物にならない数のモノがインターネットにつながります。そのため情報量の増加に伴うクラウドサーバーの増加、高性能化、省エネ化が必要になってきます。そして個々のモノには、それぞれセンサー、通信機構、バッテリーなどが組み込まれるようになります。アルバックの製造装置は、不揮発性メモリやMEMSセンサー、通信モジュール、薄膜バッテリーなどの製造において、高性能化、小型化、薄型化に引き続き貢献していきます。

➡ P.21-22



# IoT

## にも活かされる アルバックの真空技術

IoT(モノのインターネット化)が社会的課題を解決し、イノベーションを創出する手段として期待されています。

IoT (Internet of Things)とは、コンピュータなどの情報・通信機器だけでなく、世の中に存在するさまざまな物体(モノ)に通信機能を持たせ、インターネットに接続したり相互に通信することにより、自動認識や自動制御、遠隔計測などを行うことです。

モノやヒトや場所・環境も含めたすべてがつながるIoTは、企業活動

や私たちの日常にも大きな変化をもたらします。健康・医療や交通、農業など、さまざまな領域の課題を解決し、イノベーションを創出する手段として期待されています。

その実現のためには、センサーの小型化・省電力化、ネットワークの多様化、クラウドの普及などテクノロジーの進化が不可欠です。

スマートフォンからIoTへ

# スマートフォンの進化を支えるアルバックの真空技術

高性能化とともに、需要拡大が進むスマートフォン。

その背景には、最先端技術を支える真空技術の存在があります。

それは同時に、世界で唯一の真空総合メーカーであるアルバックにとって新たな価値の創造への挑戦でもあります。

ここでは、スマートフォンと最先端技術に貢献するアルバックの真空テクノロジーを紹介します。

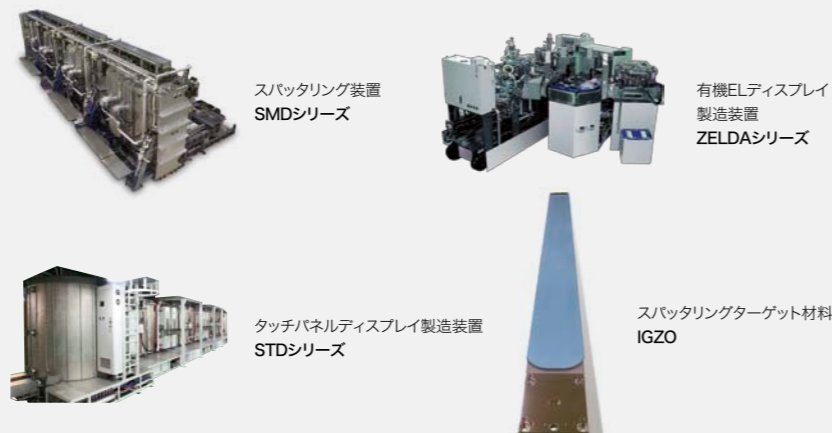


## 高精細ディスプレイ

液晶/有機EL/タッチパネル/フレキシブルディスプレイ

LTPS(低温ポリシリコン)に代表される液晶ディスプレイや、有機ELディスプレイがスマートフォンの表示部に用いられます。より高精細な画像表示やスムーズな動画再生には欠くことのできないものです。また、タッチパネルディスプレイはユーザーとのインターフェイスを担います。

アルバックは、ディスプレイの製造に欠かせない真空成膜装置を中心にパネルメーカーへ納入、製造時に使用するターゲット材料なども含め、高精細なディスプレイの製造に貢献しています。



スパッタリング装置 SMDシリーズ

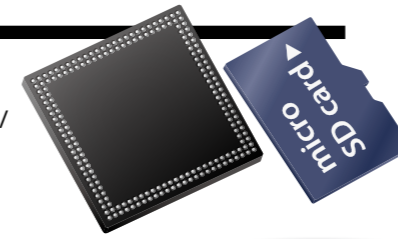
有機ELディスプレイ製造装置 ZELDAシリーズ

タッチパネルディスプレイ製造装置 STDシリーズ

スパッタリングターゲット材料 IGZO

## 半導体集積回路

高密度実装/フラッシュメモリ/  
モバイルDRAM/小電力CPU/



スマートフォンをコントロールする頭脳であるCPUや、大切なデータや写真を記憶するフラッシュメモリやDRAMなど、多くの半導体集積回路が組み込まれています。省スペース化や高集積化、省電力化など高度な技術が盛り込まれています。

アルバックは、真空装置を中心に、半導体製造ライン向けに装置やターゲット材料などを納入し、高性能化に貢献しています。



スパッタリング装置 ENTRONシリーズ

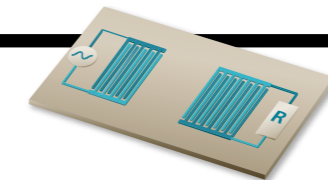
スパッタリング装置 SIVシリーズ

自然酸化膜除去装置 RISEシリーズ

スパッタリングターゲット材料

## 高速通信モジュール

SAWデバイス/高周波デバイス



通話やインターネットに接続したりと、スマートフォンには、多くの無線通信機能が組み込まれ、高周波への対応が求められています。個別で組み込まれたり、各種の部品を一体化したモジュールとして集積して搭載されています。また、集積化により各デバイスが電磁波の干渉を受けないよう電磁波シールドなどにて保護しています。

アルバックは、各種のデバイスの製造過程や電磁波シールド形成工程などで真空成膜装置を提供し、デバイスの高性能化、モジュールの高密度化に貢献しています。

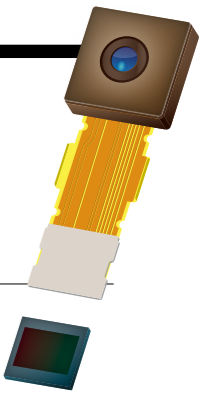


電磁波シールド用スパッタリング装置 SDHシリーズ

エッチング装置 NEシリーズ

## センサー

イメージセンサー/ジャイロセンサー など



スマートフォンのカメラ部分に使用されるイメージセンサーや、モーション検出や回転速度を検知するジャイロセンサーなど多くのセンサーが搭載され、今後さらに、種類が増えると予想されています。

アルバックは、各種センサーの製造工程において、真空成膜装置やドライエッチング装置、ターゲット材料などを提供し、センサーの小型化や高性能化に貢献しています。



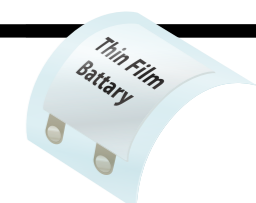
スパッタリング装置 SMEシリーズ

エッチング装置 NEシリーズ

スパッタリングターゲット材料

## バッテリー

薄膜リチウム二次電池



薄型で、フレキシブル、液漏れなどがなく安全性に優れ、長寿命といった特長をもち、既にRFIDタグやスマートカードなどに採用されています。将来的には、ウェアラブル端末やスマートフォンへの搭載が期待されています。

アルバックは、量産に向けた成膜装置や、ターゲット材料などで貢献していきます。



誘導体スパッタリング装置 SIVシリーズ

蒸着装置 EIHシリーズ

# アルバックグループの強み



## 研究開発

中長期的な視点で  
持続的に価値を創造

アルバックグループは、あらゆる産業分野に必要な不可欠な真空技術を核とした製品や材料を提供してきました。これからも真空技術を核に、顕在・潜在ニーズに応え得る革新的・先進的な技術開発を探究し、「付加価値」の高い製品や技術を創出することで、社会の発展に貢献していきます。



## 市場の重要課題(ニーズ)と利益の源泉となる商品創出

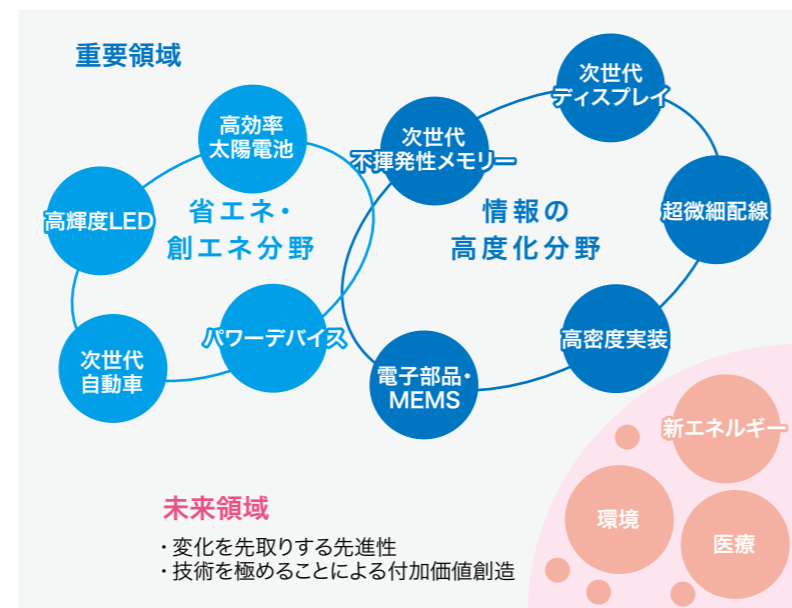
アルバックは、「真空技術」を探究し、未来が求める新しい価値を創造し、安全で豊かな社会の形成に貢献します。

重要領域	<ul style="list-style-type: none"> <li>成長・発展する分野のキーテクノロジー</li> <li>深刻化する社会問題への技術解決</li> </ul>
情報の高度化分野	次世代ディスプレイ (高精細ディスプレイ、フレキシブルディスプレイ)
	次世代不揮発性メモリー(大記憶容量・省電力メモリー)、 超微細配線
	電子部品・MEMS(IoTを支えるデバイス・センサー)、 高密度実装
省エネ・創エネ分野	高効率太陽電池、高輝度LED、パワーデバイス、 次世代自動車

## 9つの重要領域

—— 豊かで安全な暮らしの実現に向けて

アルバックの強みを活かし、9つの領域について「重要領域」として定め開発に注力していきます。また、それぞれの領域において、マーケティング担当責任者(CPM)、設計及びコストダウン担当(CDM)、技術担当(CTM)が連携して開発と強化を行っていきます。



## 開発組織

—— 新たに未来技術研究所を設置し、  
長期的な成長シーズを開拓

社長直轄の開発統括のもと、国内のみならず、海外グループも含めたグローバルな開発体制をとっています。

一体化による開発のスピードアップ、各社の革新技術と技術融合による差別化技術の創出をめざします。

また、短中期の利益を確保するための商品開発として重要領域ごとの開発運営のほか、10年、20年といった長期的なシーズの開拓のため、未来技術研究所を設置し、活動を開始しました。

### ■ アルバックの研究開発体制(2015年7月現在)



## アルバックグループのグローバル知的財産

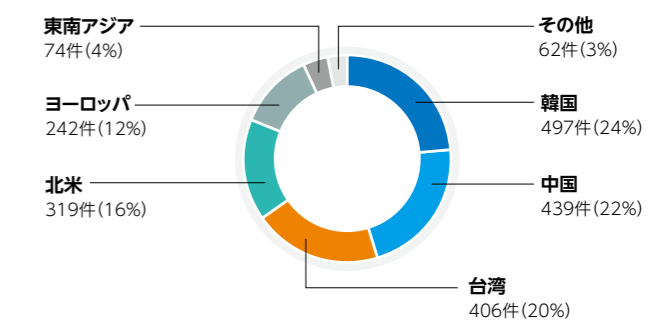
—— グループ会社を含めた  
グローバルな知的財産権の強化

アルバックグループは「グループ会社製品の知的財産権保護」「第三者の知的財産権の尊重」を基本的な知的財産戦略としています。お客様が多い国を中心に特許出願を進めています。2014年度末の海外保有特許件数は、2,039件と過去最高の保有件数になりました。特に韓国、中国、台湾を中心としたアジア圏が特許保有件数全体の約65%を占めており、大きく増加しました。

マーケットの動向変化に合わせて、日本で開発・製造されていた製品の中で海外グループ会社へ技術移転する商品群も増加しています。中国や韓国、台湾などのアジア地区では、より各国マーケットやお客様のニーズに合わせた装置開発やプロセス開発に取り組むなど、開発体制の強化を進めています。グループ会社も含めた知的財産権規程とともに、第三者の知的財産権侵害対策も整備しています。

今後も販売計画、マーケティング情報をもとにした新技術や新製品の開発と効率的な特許出願を推進します。また、事業計画との関連性を考え、効率的で質の高い外国出願を行いグローバルな知的財産権の強化を進めていきます。

### ■ エリア別特許保有件数(2014年度)



# グローバルネットワーク

## 世界の産業発展を支えるソリューションネットワーク

日本国内はもとより、欧米・アジアを中心に、50のグループ会社を通じて、地域ごとに最適な販売・サービスネットワークを構築しています。最先端技術のキーテクノロジーの一つである真空技術は、今後ますます世界中の幅広い産業・成長分野で必要とされます。

研究開発から、製造、販売、カスタマーサポートまでを一貫して行う世界最大の真空総合メーカーとして、これからも真空技術を通して世界の産業の発展を支え続けます。

## アルバックグループ

### 株式会社アルバック

#### 国内グループ会社

- アルバックテクノ(株)
- アルバック九州(株)
- アルバック東北(株)
- アルバック機工(株)
- アルバック販売(株)
- アルバック・クライオ(株)
- アルバック・ファイ(株)
- タイゴールド(株)
- アルバック成膜(株)
- 日真制御(株)
- アルバックヒューマンリレーションズ(株)
- 真空セラミックス(株)
- (株)ファインサーフェス技術
- 日本リライアンス(株)
- (株)昭和真空

#### 海外グループ会社

- 北米
  - ULVAC Technologies, Inc.
  - Physical Electronics USA, Inc.
- 欧州
  - ULVAC GmbH
- 中国
  - 愛発科(中国)投資有限公司
  - 寧波愛発科真空技術有限公司
  - 愛発科真空技術(蘇州)有限公司
  - 愛発科東方真空(成都)有限公司
  - 愛発科自動化科技(上海)有限公司
  - 愛発科天馬電機(靖江)有限公司
  - 愛発科中北真空(沈陽)有限公司
  - 愛発科商貿(上海)有限公司
  - 愛発科電子材料(蘇州)有限公司
  - 愛発科豪威光電薄膜科技(深圳)有限公司
  - ULVAC CRYOGENICS(NINGBO) INCORPORATED
  - 寧波愛発科精密鑄件有限公司
  - 愛発科(蘇州)技術研究開発有限公司
  - 洛陽鑫友鎂業有限公司
  - 香港真空有限公司
  - 愛発科真空設備(上海)有限公司



# カスタマーサポート

## グループの英知を結集したアルバックCSソリューションズ

装置の導入から運用、フィールドサポート、評価分析、材料・部品の供給、真空ポンプなどのメンテナンスなど、装置購入後もお客様に満足いただくためのカスタマーサポートをグローバルに提供しています。今後さらに多様化、高度化する要望に確実に応えるためにも、これまでグループ各社が培ってきた独自の技術やサービス・ノウハウなどの英知を結集した価値あるサービスを追求し、お客様が満足される生産活動をサポートしていきます。さらには、お客様のニーズを、新たな装置開発にフィードバックすることで、より高度な真空技術やサービスの創出もめざします。

### 装置メンテナンスサービス

お客様との密接なコミュニケーションを重視した、迅速なサービスを実現します。

#### ● グローバルCIP(Continuous Improvement Program: 継続的な改善活動)

国内はもとより海外のお客様に対し、すでにご使用いただいている装置を多世代にわたり有効に活用し、歩留り及び生産性向上を目的とするサービスです。

#### ● ファクトリーアウトソーシング (FOS)

装置や設備の運転及び維持管理・部品の発注、さらには装置の機種選定、プロセス開発のサポートを請負・派遣・出向により実施します。

#### ● 再生・精密洗浄・資源回収

部品寿命と洗浄サイクルの延長、有価物の回収などを通じてトータルコストダウンをめざします。真空装置全体の豊富な知識をもとに、最適な表面処理と洗浄を提案します。

### コンポーネントメンテナンス

#### ● ポンプメンテナンス

真空ポンプなどコンポーネントのメンテナンスをします。

#### ● 真空計JCSS校正サービス

アルバックは、「圧力(真空計)」区分のMRA/JCSS\*認定校正事業者です。

※ JCSS(Japan Calibration Service System): 計量法校正事業者登録制度  
 ※ 国際MRA(Mutual Recognition Agreement): 国際相互承認

### 部品・消耗品

自社製造パーツによる高品質・迅速・安心デリバリーを実現します。

### 分析サービス

アルバックグループの分析評価装置を用いた分析サービスを行います。

### 中古品売買

中古品の売買・改造・移設・輸出入など、部品から生産装置まで幅広く取り扱います。

### トレーニングサービス

アルバック製品(装置、真空ポンプ、コンポーネント)のトレーニングサービスを行っています。



# 品質保証・製品安全

今年度より、フロントローディング活動をアルバックグループ品質方針に加えることでグループ各社に活動を展開し、高品質で安全な「アルバック品質」でお客様の期待に貢献できるような取り組みを展開していきます。

## アルバックグループ品質方針

「お客様の信頼は、品質の確保から」を基本スローガンにフロントローディングにより品質を作りこみながら世界ニーズを盛り込んだ商品・サービスを提供しお客様の永遠のパートナーとして発展する

### 行動指針

- 私たちはすべてのしくみ、手順を厳守します
- 私たちは次工程に対し、不良品は出しません
- 私たちは次工程に対し、納期を守ります
- 私たちは製造予算を守ります

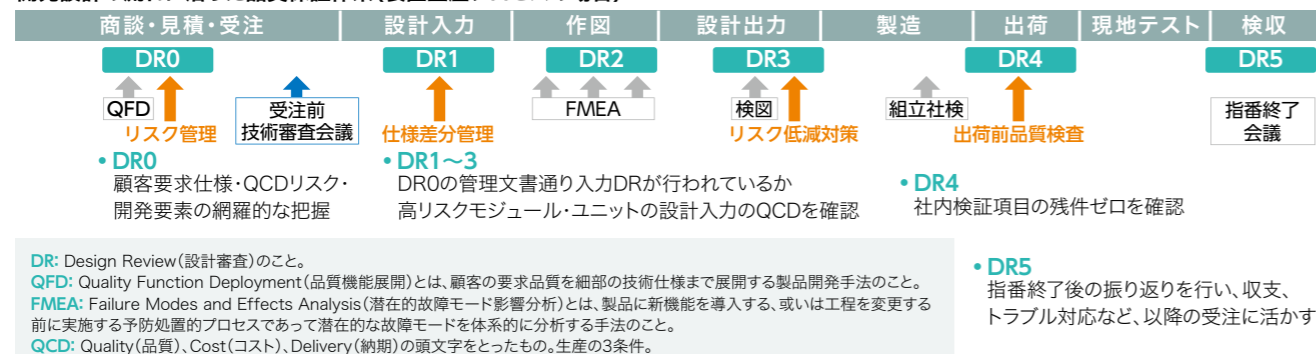
## フロントローディングのグローバル展開

フロントローディングを強化するために営業部門、技術部門、設計部門と製造部門との技術・技能の連携、経験やノウハウの連携、関連する情報・データの連携を図り、それぞれの成果を上流の開発設計プロセスに反映していく活動に注力しています。今後は海外の品質保証メンバーも直属とし、教育・スキルアップを図り、グローバル化に対応した「アルバック品質」を世界中に届けていきます。

## グローバル認証の進捗について

アルバックグループ製品は、アルバック商標の使用基準に対する適合性を厳格に管理、評価することにより「アルバック

### 開発設計の流れに沿った品質保証体系(装置生産プロセスの場合)



品質」が維持されています。

2014年度、アルバックグループ各社のより一層の品質向上をめざし、高品質な製品を提供するために、アルバックグループ18社のISO9001認証を統合しました。

2015年度は、さらに19社の統合を行い、グローバル化に対応した「アルバック品質」を世界中に届けます。

## 製品安全

機械による労働災害防止を目的に、機械安全に対する知識を有する人材育成の必要性が企業に求められています。アルバックにおいても、国際規格に基づく安全技術を体系的に学び、設計、製造現場に機械安全の考え方を根付かせる人材育成の取り組みとして、2014年度より機械安全教育を展開してきました。今年度は、さらなる普及とグローバル展開を図っていきます。



リスクアセスメント実習風景



3Dプリンター模型を使ったフロントローディング風景/機械安全教育

# 調達 (サプライチェーンマネジメント)

アルバックグループでは、適正かつ公正・公平な取引関係を維持・促進し、サプライヤーの皆様との相互に確かな信頼関係を築けるよう努めています。また、各事業部とともに徹底したコストダウン活動により、製品競争力の強化も図っています。

## 徹底したコストダウン活動による製品競争力強化

### —— サプライヤーの皆様とともに徹底したコストダウン活動を推進する。

- ① フォアキャスト、集中購買でコストダウンを推進する。
- ② デザインレビューにて効果的なコストダウン提案(バリューエンジニアリング=VE提案)を行う。  
VE提案についてはサプライヤーの皆様からの提案を積極的に受け入れる。
- ③ サプライヤーの皆様からの情報をもとに購入品の標準品化推進と置換え提案を行う。
- ④ バランスの取れたグローバル調達を推進する。
- ⑤ 発注者・技術、設計者がサプライヤーの皆様の実際の現場を訪問して実見し、意見交換を行い、コストダウンにつなげる活動を行う。

### —— コストテーブル、コストベンチマークの教育を継続して指導者育成を図り生産性アップを推進する。

- ① 原価積算能力教育を継続しバイヤースキルをさらに向上させる。
- ② サプライヤーの皆様とともに適正価格を迫及する。

## 調達リスク低減活動

部品のサプライチェーンを管理し、自然災害や事故などにおける重要な製品・サービスに供する部品の供給リスクを最小化する活動をしています。サプライヤーの皆様と連携して情報を共有化し調達リスクの低減を図っています。

対象製品・サービスの決定	2013	2014	2015	2016
Step1 対象製品/構成部品の洗い出し				
Step2 サプライヤーへの聞き取り調査				
サプライヤー体制評価・改善				

Step1、Step2の調査、サプライヤーの皆様への体制評価・改善をアルバックの製品ごとに改善していくサイクルを回しています。

## サプライヤーの皆様へのお願い

アルバックグループでは、これまで法令の遵守や公正で自由な競争の維持促進、サプライヤーの皆様との健全で良好な関係について「アルバックグループ調達基本方針」を掲げてきました。今後ともサプライヤーの皆様とさらなるパートナーシップの構築とサプライチェーンも含めて社会的責任を果たすことを目的に、紛争鉱物問題への対応と下記9項目を新たに掲載し皆様にお願ひさせていただいています。

- 法令・社会規範\*
- 公正な取引と企業倫理
- 人権尊重と労働・安全衛生
- 製品・サービスの安全性・品質
- 情報セキュリティ
- 環境保全
- 適正な価格・納期の実現
- 技術力の向上
- 健全で安定した企業

\*紛争鉱物については上の法令・社会規範の中で取り上げています。



サプライヤーの皆様向け業容説明会(毎年開催)

# 人材マネジメント

価値創造型ビジネスモデル構築のため、一人ひとりの力を高めながら組織を活性化させることに注力しています。  
また、グローバルな観点からアルバックグループ全体で社会に貢献する組織づくり・人づくりをめざします。

## 働きがいのある組織をめざして

### 個人と組織の活性化

「頑張った人が報われる制度」を個人と組織の活性化の基本と捉え、合理性をキーワードとして諸規定や制度の継続的見直しを進めています。同時に権限移譲を積極的に行い、従業員一人ひとりが当事者としての情熱や向上心をもって主体的に各自の責任を全うできる環境を整え、あるべき姿、理想の姿を希求します。

目標管理、評価制度においては、明確な物差しで管理、評価することに注力するとともに、結果のみを重視するのではなく、「困難な課題に積極果敢にチャレンジすること」や「チームで仕事を進めること」がより高く評価される制度運用を行い、開発型企業として失ってはならない柔軟な発想や自由闊達な企業風土は今まで通り大切にしていきたいと考えています。

また、教育の機会を増やすことに注力しています。すべての従業員が能力開発に自発的に取り組めるよう、さまざまなプログラムを提供し、個人の成長を促すとともに、ターゲットを絞り込んだ教育についても積極的に進めています。

次世代育成・ローテーション制度の推進も組織活性化には欠かせない課題と認識しています。スペシャリストとゼネラリストのバランスに配慮しつつ、国内外グループ会社を含め、考え方や文化の異なる人材の多様性を意識した人材交流を行い、柔軟な組織運営に取り組んでいきます。

## 垣根を越えた連携をめざして

### 階層別研修

アルバックグループでは、入社時、2年目、社内資格取得時、管理職登用時などの節目で集合研修を実施しています。これまでは各階層において必要な考え方を身に付けることを目的としてきましたが、2014年度は全階層のテーマを「連携」と統一して研修を行いました。一口に連携といっても、上司・部下や

チーム内などの社内での連携から、社外のお客様やサプライヤー様までを含む大きな連携までさまざまです。受講生は階層に応じて、チームディスカッション、実際の事例をもとにした事例研究など、複数の切り口から連携の重要性を学びました。

アルバックグループが事業部や会社の垣根を越えて一層の連携を深められるよう研修でもバックアップをしていきます。



### 人材育成基本方針 (2012年度改訂)

1. 個人を尊重し互いに信頼し、責任を全うする人材
2. 本質を見極め、情熱と執念で革新的技術・企画を創出する人材
3. 向上心に富み、目的達成に向けて自主的に行動する人材
4. グローバルな視点を持ち、世界を切り拓くリーダーを目指す人材

## 技術の伝承、共有化のために

### 技術者教育

アルバックグループが保有する技術を次世代に伝承することを目的とし、「エンジニア教育」を実施してきました。2014年度からはエンジニア教育を一步進めた「技術者教育」を開催しています。アルバックでは多種多様な技術・製品を扱うため、技術教育は各研究所・事業部内でのOJT教育が主流でした。OJT教育を統合するなどして体系をつくり、各職種に必要な知識・知見を学ぶための教育を計画的に実施するようになってきました。形式は座学やワークショップ、見学会など、目的によってさまざまです。2015年度は講師育成と技術者教育の定着に注力します。

## ワークライフバランスのとれた働き方をめざして

### 働きやすい職場づくり

アルバックでは、従業員が働きがいのある仕事と充実した生活の両立ができることをめざしています。

- 年次有給休暇は入社日から付与
- スポット年休推進運動を実施
- 選択式夏季休暇制度の継続実施
- 各部署に労務管理責任者を設置し、徹底した残業管理を実施
- 時差出勤勤務時間選択制度及びフレックスタイム制の導入

といった施策を取り、成果を上げています。

また、ダイバーシティの推進では、近年では特に女性社員の育休取得・復職率が高いことが特長です。女性社員の人数は少ないものの、2014年度での取得者は2名、復職者が6名であり、復職率は100%です。

年度	育休取得開始	復帰(休業終了)
2014年度	2名	6名
2013年度	7名	2名
2012年度	1名	1名

### 主な支援制度

- 育児休業(1年半までの延長あり)
- 育児短時間勤務制度
- 子どもの看護休暇
- 介護休業

### 産休・育休を終えて

監査室 内部統制管理室

### 安木 綾子

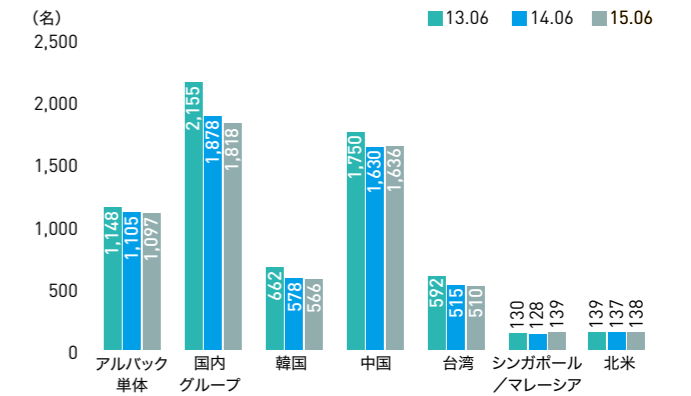


### 部内の協力により仕事と育児を両立

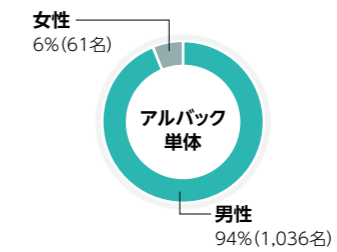
産休・育休を合わせて1年4カ月取得し復職しました。復職前は仕事と育児の両立ができるか多くの不安があったのですが、復職したばかりの頃、役員をはじめたくさんの方に「まずは子ども優先で!」とっていただき、とても励みになりました。また、予め残業や出張が可能な日を報告することで、できる限りの調整をいただいています。そのため、時間の制約はありますが、休業前と同様の仕事を任せていただき、充実した日々を過ごしています。

## 人事データ

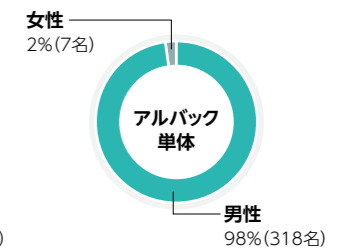
### ■ アルバックグループ社員数



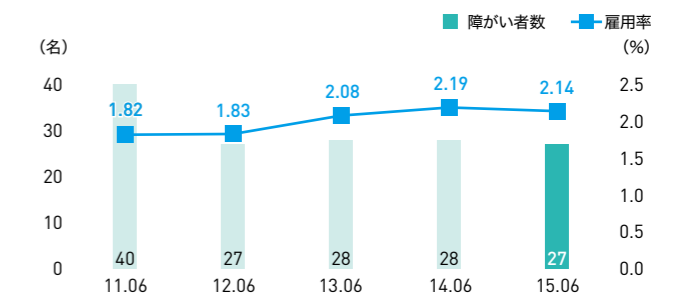
### ■ 社員男女比率 [15.06]



### ■ 管理職男女比率 [15.06]



### ■ 障がい者雇用率





# ものづくりを支える健康づくり

アルバック健康推進室は、アルバックの“ものづくり”を“健康づくり”で支えています。  
社員が生産性の高い状態で働くことができるよう、『個人と組織の活性化』を健康推進室のビジョンに定めています。

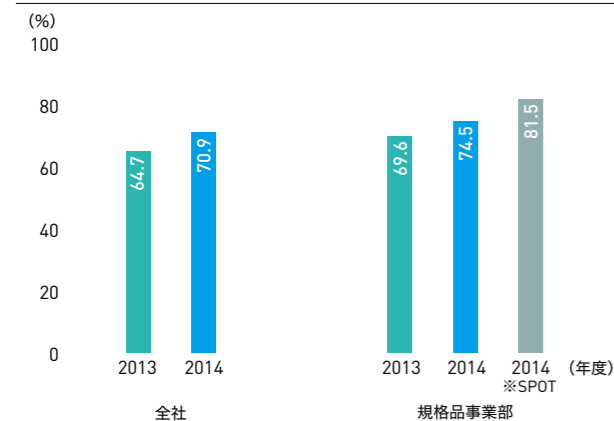
## 個人と組織の活性化を“健康”視点で支援する

アルバック健康推進室は、従業員の健康管理を通じて、活動のビジョンである「個人と組織の活性化」実現を進めています。活動の評価指標として、「身体面」「精神面」「社会面」の3領域の健康度を定期的に社内で調査しています。この調査のうち特に「社会面」の項目については、職場にフィードバックを行い、職場活性化をめざしたアクションプランづくりを支援しています。この取り組みは、2014年度が活動初年度であるため、モデルづくりを目的としていくつかの部署で実施しました。規格品事業部での実施は、以下インタビューに記載があるように好評を得ています。2015年度は対象職場を増やし、個人と組織の活性化に貢献していきます。



健康度フィードバック実施風景

### 健康度データ（期待・役割が分かっている）



※健康度フィードバック後に実施したアンケート結果(2015年1月)

### 健康推進室のビジョンと目標



## メンタルヘルスケア

2013年以降、社内規程の「心の健康づくり細則」に基づき、セルフケア教育とラインケア教育を展開しています。現在までに半数を超える社員が受講しました。また、従来から継続している復職支援の取り組みの成果もあり、メンタル不調による休職者の発生割合は低水準を維持しています。

### メンタルヘルス教育体系

	セルフケア教育	ラインケア教育
目的	上司部下のコミュニケーションの向上	安全と衛生の確保 モチベーションの向上
講師	保健師	産業医
対象	全社員	全管理職
内容	傾聴 認知 アサーション	安全配慮義務履行 ケースマネジメントの勘所 モチベーションマネジメントの基礎

### インタビュー

執行役員 規格品事業部長

柳澤 清和



### 健康度フィードバックを実施しようと思ったきっかけは？

業務の進捗や業績とは別の視点で事業部を見ることに興味を感じたからです。個人と組織の強みを活かすことが組織活性化につながるかと期待しました。最初は、業務に直結しないので、管理職が積極的に活動してくれるか？という不安もありましたが、今では各部長の意向に任せて進めてもらっています。部門によってうまくいったところとそうでないところがあるため、好事例を水平展開することができ、回数を重ねるごとにアクション項目も具体的になってきました。若手社員からの自発的な企画により、十数年ぶりに事業部全体での納会を実施するなど、組織としての一体感は強まっていると感じます。今後は、他の部門や事業部との関係を強化するような取り組みにつなげていきたいと思っています。

# 労働安全衛生

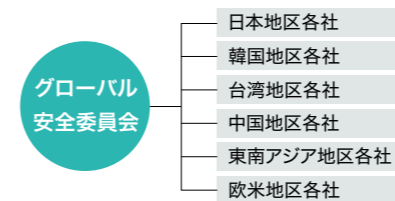
アルバックグループは、「安全第一」を企業経営の基本理念とし、お客様に利用していただくさまざまな製品やサービスの安全と、私たち自身が明るく元気に働くことのできる活気ある職場づくりを、リスクアセスメントを中心とした安全管理システム(OSHMS)の運用によってめざしていきます。

## アルバックの安全衛生活動

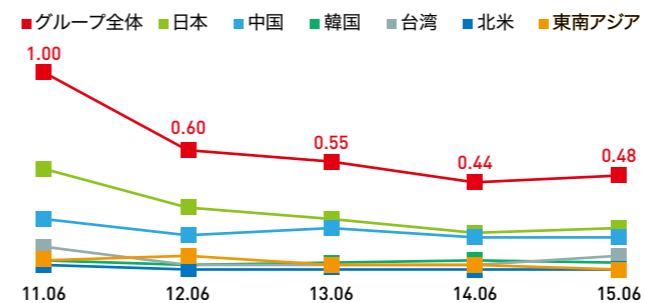
### — お客様と従業員の安全と健康の実現に向けて

アルバックグループは、お客様と従業員の安全と健康の実現のために、グローバル安全委員会を定期的に開催し、その中で、グループ各社の代表によるグループ全体の方針の決定と水平展開を図り、グループ全社が一体となって安全衛生活動を推進しています。各社においては、OSHMSを運用し、社長または安全担当役員による会社全体のマネジメントレビュー、従業員一人ひとりによるリスクアセスメントなどを通じて、経営トップ層から現場作業員に至るまで、全社を挙げて安全衛生活動に取り組んでいます。このような活動の積み重ねにより、アルバックグループの労働災害は年々減少しつつあります。

### ■ アルバックグループ安全管理体制



### ■ アルバックグループ労働災害発生率の推移



このグラフは、アルバックグループ全体の各年度における労働災害発生件数の割合を、2010年度(2011年6月時点)を1.00として表したものです。2014年度(2015年6月時点)の労働災害発生率は、前年度よりやや増加していますが、2010年度に比べて52%減少しており、減少傾向にあります。



フォークリフト安全技能講習 (ULVAC Technologies, Inc.)



救急救命講習 (アルバック・クライオ(株))

### 毎朝朝礼で安全スローガンの掛け声を実施 (韓国地区)

活動事例紹介  
1

韓国グループは、「安全を確保しないと競争に生き残れない」「安全経営が企業の競争力である」ことを認識し、安全文化をシステム化して定着させていく必要があると考えています。安全文化の定着には、役職員が常に安全について考え、実践できるように、会社として責任を持って安全第一の環境づくりに取り組むことが重要です。そこで、ULVAC KOREA, Ltd.では、2015年7月から役職員の安全意識を向上させるため、毎朝の朝礼にて、「安全は実践、安全は習慣、安全は生活」という安全スローガンの掛け声を実施しています。



安全保健共生協力プログラムの運用 (ULVAC KOREA, Ltd.)



組織活性化のためのスポーツ大会 (ULVAC KOREA, Ltd.)

### 各社の業務形態に適した安全管理システムを構築 (中国地区)

活動事例紹介  
2

中国地区を統括するULVAC (CHINA) HOLDING CO., LTD.は、会社全体の無災害は従業員一人ひとりの安全意識の向上によって達成されるという理念の下、安全活動を推進しています。そこで、作業前に従業員へ安全教育を行い、日々の現場管理者パトロールにてその効果を確認するとともに、改善すべき点を確実に改善し、PDCAを回して各社の業務形態に適した安全管理システムを構築しています。また、安全表彰制度を設け、安全活動に大きく貢献した従業員を模範として称え、さらなる安全意識向上の励みとしています。このような活動を通じて、労働災害の削減を図っています。



消火訓練 (寧波愛発科真空技術有限公司)



新入社員安全教育 (寧波愛発科真空技術有限公司)

# 環境

アルバックグループは、お客様の手で最大限の環境貢献ができる製品の開発、製造に力を入れています。また、事業活動の中から発生する環境負荷を最小限にすることを目標に、グループ一体となって活動を推進しています。

## アルバックグループの環境経営

アルバックグループは「省エネ・省資源・環境保護に貢献できる商品の提供」という環境方針のもと、お客様が環境貢献を実感できる製品を提供しています。また、消費するエネルギー、排出する廃棄物の管理・削減を徹底的に行い、環境負荷を最小限にすることを目標に活動を行っています。

アルバックグループはアジア地域を中心に、欧米など幅広い地域に展開し、グローバルな生産体制を有していることから、グループ間の情報の共有、トップマネジメントによる指示の素早い展開などを確実に行う必要があります。各社で取得していたISO14001の認証を統合化し、グループとしてのガバナンスの強化を図っています。

今後も、アルバックグループは「ULVAC」製品を通し、環境負荷の削減を図っていきます。

### 環境理念

アルバックグループは、地球環境の保全が人類共通の重要課題のひとつとして捉え、事業活動のあらゆる面で環境の保全に配慮し、住みよい地球と豊かな社会の発展に貢献します。

### 環境方針

省エネ・省資源・環境保護に貢献できる商品の提供

- ① 製品(アルバックグループ製品・最終製品)の省エネ・省資源・環境保護
- ② アルバックグループ製造プロセス(工程)における省エネ・省資源・環境保護

## 省エネに貢献できる商品の提供

## 凍結乾燥工程モニターシステム「DRYMONI」

### 生産性向上・品質改善に貢献する凍結乾燥工程の見える化システム「DRYMONI」

凍結乾燥(フリーズドライ)とは、水溶液や食品を凍結させ圧力をその凍結温度の飽和蒸気圧以下に下げて水分を昇華させる乾燥方法です。これまで対象物に温度センサーを挿入して温度計測し、人が乾燥終点を判断するのが一般的でしたが、大型装置や大きい容器で温度計測してもその温度が全体を代表しないため、未乾燥部分が残ったり、逆に未乾燥部が残らないように十分すぎる余裕時間を設定するため無駄な時間・余分なエネルギーロスが発生していました。そこで、乾燥中は水分が昇華しており水分昇華をモニターすれば、乾燥工程が「見える化」できるため、乾燥槽の水分レベルを計測できるシステム「DRYMONI」を開発しました。品温を測定しなくても凍結乾燥工程の水分昇華を把握することができるため、品質管理の厳しい医薬品業界で運用されるPAT(Process Analytical Technology)としていち早

く凍結真空乾燥装置に標準装備しました。このシステムで凍結乾燥工程をモニターし凍結乾燥プログラムの最適化を図ることで、未乾燥による品質不良の防止、乾燥終点の正確な把握による無駄時間の削減など、生産性向上・品質改善に貢献します。

また、「DRYMONI」が組み込まれた装置をご使用中のお客様より、旧型設備や他社製装置にも使用したいとの声に応え、スタンドアロンタイプの発売を開始しました。



産業機器事業部 設計部 開発メンバー



## 2014年度のアルバックグループの環境活動

アルバックグループは「5年間で2013年度比10%のエネルギーコスト削減」という目標のもと、省エネ活動を行っています。本年度は売上の増加はありましたが、エネルギーの使用量(電力)は前年度と比較すると約0.3%の削減となりました。日本国内では平均約2.3%程度の削減となっています。一方で、生産の海外シフトもあり海外は約3%の増加となりました。今後も生産の最適化と海外展開を進めるため、海外のエネルギー使用量が増える傾向が続くと思われます。また、5年間の推移でみるとCO<sub>2</sub>の排出量が増加していますが、これは、集計の対象会社(海外のグループ会社)を増やしたことが主な要因です。

一方、廃棄物総量は前年度と比較し約15%の増加となりました。この増加は、生産量の増加などが起因していると思われます。廃棄物の埋立て率はアルバックグループの基準(3%以下)に対し3.7%でした。現在、再資源化を全社として進めているため、前年度4.9%に比べその効果が出ていることが確認できました。一方で、有価物化率は30%となり、昨年と比較し8%ほど上昇しました。有価物化は、貴重な資源であるマテリアルリサイクルの視点からも重要となるため、引き続きアルバックグループとして推進してまいります。

## パフォーマンスデータ

### ■ マテリアルバランス

INPUT		OUTPUT	
電気使用量	159,176kWh	CO <sub>2</sub> 排出量	93,017t-CO <sub>2</sub> (電気・ガス・燃料の使用により発生)
ガス使用量	LPG:106t LNG:616t 都市ガス:1,451千m <sup>3</sup>	廃棄物総排出量	8,850t 内 有価リサイクル量 2,040t
燃料使用量	重油:482KL 灯油:31KL 軽油:99KL	最終処分率	3.7%
水使用量	1,162千m <sup>3</sup>		
梱包材	1,108t		

※本データは主要な国内外42社のデータをもとに作成しています。  
※梱包材の使用量は国内外26社のデータをもとに作成しています。

アルバックグループでは事業活動から起因する環境負荷を下げるため、全社を挙げて今後も引き続き環境管理活動を進めていきます。

### 第1回グローバル業務改善報告会 ～銀賞をいただいて～

アルバック東北株式会社 総務部施設課長

### 小向 幸生



担当者一同  
(中央が筆者)

### グループ目標の達成に向けて、 攻めの省エネを推進

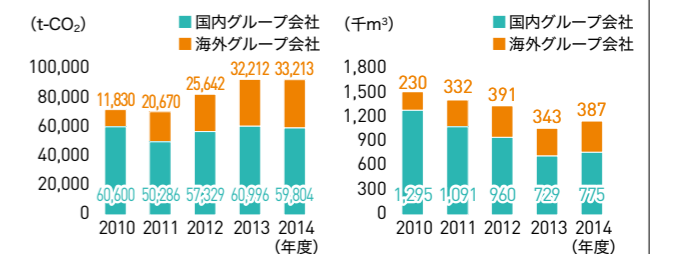
海外も含めたこの報告会において、『アルバック東北の工場エネルギー削減活動報告』と題して発表し、3年間の長期にわたる省エネに関する改善効果に対して銀賞を受賞しました。従業員全員で継続的に努力し成果を追い求めるという貴重な経験を活かし、今後も高い目標に対する取り組みを通じて、当社の発展に全力を尽くしていきます。

また、今後アルバックグループ全体で取り組むこととなった「2013年度のエネルギーコストを5年で10%削減する」という高い目標に対して、グローバル業務改善報告会にもう一度参加できるような成果をあげるために、攻めの省エネを推し進めていきたいと考えています。

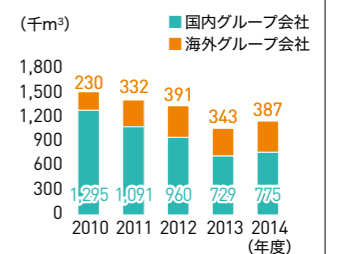


報告会でのプレゼンの様子

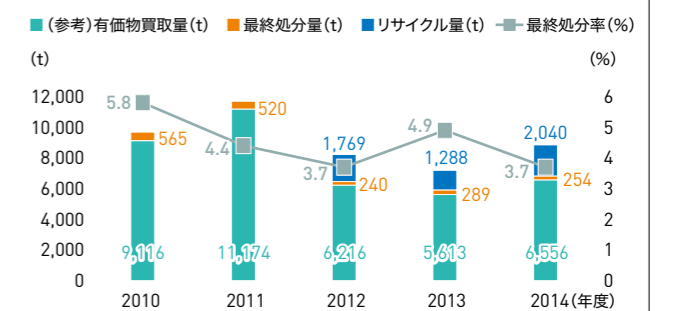
### ■ CO<sub>2</sub>排出量推移



### ■ 水使用量推移



### ■ 廃棄物量推移



# さらなる成長フェーズへ

## 「活性化」から「一体化」に向けた生産面での取り組み

司会進行  
(株)アルバック 経営企画室 広報・IR室長

鈴木 憲明



小田木 秀幸

(株)アルバック  
取締役常務執行役員 生産本部長

森本 潤

(株)アルバック  
生産本部 生産技術センター 品質保証部 部長  
兼 教育センター 部長

廣瀬 知子

(株)アルバック  
生産本部 教育センター 専門室長

アルバックグループは2012年度から、“活性化”をキーワードに「事業構造改革プロジェクト」を推進してきました。これにより、開発・営業・生産セクションのグローバルな連携が強化され、製品競争力や収益力が高まってきました。そして、さらなる成長を確実なものとするために、次のステップとして“一体化”をキーワードにした経営へと舵を切りました。こうした中、アルバックグループの価値創造の源泉である開発力と人材力をベースとした総合力をいかに強化していこうとしているのかについて、生産部門の責任者が集まり座談会を行いました。

**司会:** 事業構造改革プロジェクトによって、生産本部の担う役割が大きく変わったようですね。

**小田木:** 従来の生産本部の役割は、社内IT化による業務(決算、メールシステム他)効率アップ、品質・環境マネジメントシステムの運営事務局及び品質検査、購入品の調達、環境・安全の

確保支援など、事業部のサポートがメインでした。しかし、現在では従来の役割に加え、3年前に発足した事業構造改革プロジェクトのもと、フロントローディングを確実に推進し、安定した利益を創出するための仕組みづくりの機能を担っています。具体的には、各事業部や共業各社のものづくりの現場に積極的に関わり、必要に応じて改善指示や指導を行い、グループ全体のものづくりを指揮することがメインのミッションとなりました。言うなれば、事業部を支える側から引っ張る側へと役割が変わったわけですから、最初は戸惑いもありましたが、グループのさらなる成長に向けて部員一同使命感を持って取り組んでいます。

**司会:** 生産を統括される立場になられて1年が経過しました。現在のフロントローディングの状況、ものづくりの体制について、どのように評価されていますか。

**小田木:** この3年間、“活性化”をキーワードにフロントローディ

ングをとにかく徹底してきたことで、計画通りの利益を創出するためのものづくりの体制が着実に整ってきたと思います。取り組み過程ではさまざまな課題もありましたが、過去の慣例にとられることなくゼロベースで仕事の仕方を見直し、グループ一丸で改善を図ってきた成果だと思います。実際にフロントローディングの導入前後でトラブルの発生件数や製造予算オーバーの件数が着実に減少しています。そして、改善効果が目に見えて表れてくるにつれて、取り組みへのモチベーションや本気度が増し、部門間の意見交換も活発になりました。さらには各事業部の取り組みにも相乗効果が見られ、グループ全体としてのものづくりの体制・姿勢が加速度的によい方向へと活性化されていると思います。

**森本:** 事業環境の変化が激しい現在、一組織・一部門だけで何かを改善しようとしてもやはり限界があると思います。しかし、このようにグループ一丸で共有しながら取り組みを進めることで、改善のスピードがアップし、新たな発想もたくさん生まれ、効果や効率も数段アップします。私たち生産本部の使命は、こうした取り組みを的確にモニタリングしながら、常に活性化させていくことです。現状、フロントローディングの取り組み成果は徐々に上がってきておりますが、各事業部での定着及び効果的運用とグループへの展開に向けた活性化をさらに推進していきたいと思っています。

**司会:** “活性化”という点では、2014年度から3つのグループ活性化プログラムを展開されていますが、取り組みの背景や活動内容についてお聞かせください。

**小田木:** フロントローディングの推進により、ものづくりの体制が整い活性化されてきた一方で、まだまだ改善の余地があると考えています。やはり当社グループの価値創造の源泉は人材力であり、社員の能力やスキルを十分に引き出し、グループの多様性を最大限に活かすことができなければ、アルバックがめざす“あるべき姿”に近づくことができません。つまり、ものづ

くりの体制とそれを支える人材の育成を両輪で強化する必要があります。そこで、2014年度は従来実施していた“生産技術報告会”をグローバル化し、また、新たに“グローバル業務改善報告会”、“Skill Challenge”の3つのグループ活性化プログラムを展開し始めました。(詳しくはP38参照)

**森本:** 当社グループの強みと価値は総合力であり、グローバルに多様な人材がいることだと思います。そうした強み・価値をいま一度再認識しながら、しっかりと社員の能力を引き出し活性化させていくためにこれらのプログラムを企画しました。今回のポイントは、技術分野に限らず、事務職を含めたあらゆる組織・部門を対象としたことです。さまざまな部門で働く社員が、日々の実務成果や教育スキルなどを報告、競い合いながら共有することで、実務をグローバルに改善し、さらには経営に活かしていくとともに、社員の提案や創意工夫、努力の成果を広く公平に判断し評価する仕組みをめざしています。

**司会:** 社員の皆さんの反響がかなりあるようですね。

**廣瀬:** これまでは各国それぞれで実施していたものを、グループ一体で展開したことで、競争意識が刺激され、さらにコミュニケーションの機会も増えたことで、社員の皆さんがとても生き生きと取り組まれています。実は先日、中国での報告会があり参加してきました。そこでは、やはりグループ全体で成果を見せる機会が生まれ、非常にモチベーションが上がっているのを感じました。また、日本でもっと技術を勉強したいという社員も増えているという話を聞きました。このように今回のプログラムによって、社員の皆さんが活気づいたことは一つの成果といつてよいと思います。

**司会:** 技術力の強化に関連して、2015年度から生産本内部に新たに教育センターを新設し技術教育に力を入れていくようですね。

# グローバル生産

多様性(考え方や文化の異なる人材の存在)が刺激となり組織を活性化します。アルバックのものづくりの強さがどこにあるのかを見極め、さらに強めていくとともに、足りない部分を補うため、グループ一体となった活性化プログラムを展開し、グループのバリューチェーン強化を進めています。

## アルバックグループ活性化プログラム

技術・技能や管理・営業・共通・本社部門など、アルバックで働く社員が、日ごろ培っているスキルや成果を競い合いながら発表しています。これらのプログラムをグローバルに展開することにより、社員の提案やアイデアを経営に活かすとともに、創意工夫や努力の成果を評価し、広く共有・活用する取り組みとなっています。



### 金賞受賞者コメント

#### 1 グローバル生産技術報告会※1

アルバックグループ各地域で生産技術に関わるテーマについて予選会を開催、そこで選ばれた社員による本選を行う2段階構成により、質の向上をめざすとともに、グループ全体で成果を共有・活用します。



(株)アルバック  
規格品事業部  
電源技術部 2課

大倉 章弘

#### 『DC電源のものづくり』

大勢の前で発表するという滅多にない特別な雰囲気の中、聞いていただいたことは、よい経験になりました。また、新型DC電源のことや、さまざまな部署と連携して茅ヶ崎の工場内で電源を生産していることを皆さんに知っていただき、宣伝にもなりました。発表者同士の交流を含め、報告会での経験を今後の業務にも必ず活かすことができると考えています。

#### 2 グローバル業務改善報告会※1

「明日への“KAIZEN”」をテーマに、グループ各社で行われている、管理・営業・共通・本社各部門での改善活動及び5S活動について発表し、その成果をグループ全体で共有・活用します。



(株)アルバック  
人事部 健康推進室

中尾 智

#### 『市販ソフトによる従業員と 間接部門をつなぐWebアンケートの開発』

間接部門の一員として日々頑張っている中で、このような機会があればよいなと思っていました。今回の企画に喜んで参加したところ、高い評価をいただき、とても嬉しかったです。また、報告会を通じて、本社部門・間接部門で頑張っている人たちがたくさんいることが分かり、これからの会社の成長も期待できると感じました。ビジネスの現場を裏方で支える立場として、これからも誠心誠意頑張りたいと思います。

#### 3 Skill Challenge※2

アルバックのものづくりにおける現場技能の重要性を再認識する中で、日ごろの業務により培われた技能をグループ全体で競うことにより、個人の技能のさらなる向上をめざすだけでなく、グループ間で技能を伝承・共有します。



アルバックヒューマン  
リレーションズ(株)  
FOS部門  
堺本部 堺センター  
近畿1グループ  
滋賀CSセンター

斎藤 康智

#### 『サービス&メンテナンス部門 ポンプオーバーホール』

今回のSkill Challengeでは、普段の作業では決して得られないことのない緊張感とそれを上回る達成感を得ることができました。また、世界にポンプの整備をしている仲間がいることを認識できた大会でした。記念すべき第1回のSkill Challengeに名を残せたことを誇りに感じます。今後、さまざまな分野でSkill Challengeが開催され、アルバックグループ全体が活性化することを願います。

※1 今回は、6カ国、14社、18テーマの参加がありました。

※2 今回は、5カ国、5社、6名の参加がありました。

小田木:真空技術というのは、成長市場にこそ必要とされる技術だと考えています。私たちはこれまでも「真空技術で産業と科学に貢献する」という企業理念のもと、時代が求める新しい価値の創造に果敢に挑戦してきました。近年、地球環境問題をはじめとした社会課題が顕在化する中、当社グループの製品や技術は、特にエネルギーとIoT分野で貢献していくことができると考えています。しかし、そうした分野ではこれまでよりも難しい技術開発が求められますし、かつ安定した利益を創出しながら開発することが必須になりますので、スピードや効率なども求められます。そこで、何よりも必要になるのは技術力であり、スキルアップや技術の向上が重要になるわけです。そこで、教育センターを新設し技術教育に一層力を注いでいこうと考えています。

廣瀬:これまで社員の教育は人事部が行っていましたが、より専門的な技術に関する教育は生産本部内で実施することとしました。現在は、生産本部が部門長会と共同で、各部門であるべき姿を描き、そこから必要なコア技術やスキルを導き出し、教育資料を作成しています。今後はその教育資料をもとにプログラムを作成し、計画的に技術者教育を行っていきます。

森本:今後はこの教育プログラムをきっかけに、社員のさらなる成長やキャリアアップにもつながっていくことを期待しています。例えば、製造で経験を積んだ社員が次のステップとして、製造の指導者なり幹部を目指す。または、製造で培った経験を活かして、設計や技術の仕事を目指す。ずっと同じ業種を黙々とやるのではなく、人材が流動して組織も個人も活性化していく。そして、技術力の向上と結果としてグループ全体の成長にもつながる。そういったかたちが理想だと考えています。

司会:最後に今後の取り組みについてお伺いします。小日向社長は、2015年度から“一体化”をキーワードにした経営を推進すると明言しています。今後、生産本部における“一体化”に向けた取り組みに関して、展望などをお聞かせください。

小田木:これまでに進めてきた“活性化”をキーワードとしたフロントローディングの徹底によるものづくり体制の強化とそれを支える人材の育成に関しては、継続して着実に実行していきます。今後はそこに“一体化”というキーワードが加わるわけですから、部門別・会社別の枠を超えて、事業全体として究極の効率アップをめざしていきます。つまり、開発・営業・生産の一体化やグループ・組織の一体化も含め、とにかくムリ・ムラ・ムダを徹底的に取り除き、全社員のエネルギーが向かう方向を、安定した企業体質を築くという目標に向けて集中できるようにすることだと思っています。まず当面は、国内の生産体制にフォーカスして“一体化”に向けた改革を進めていきます。課題は少なくありませんが、時代が求める新しい価値を創造し、幅広い産業、そして社会から必要とされる企業グループとなるために、グループ社員で力を合わせ、頑張っていきたいと思っています。



第1回 グローバル生産技術報告会



第1回 グローバル業務改善報告会



第1回 Skill Challenge

# 社会貢献活動

アルバックグループは、社会貢献活動基本方針に基づいた社会への貢献を通じて、地域・文化に根ざしたグローバルな社会貢献活動を推進していきます。

## アルバックの社会貢献活動

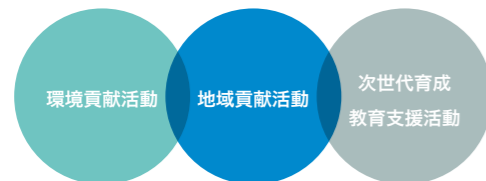
アルバックグループは、以前から世界各国でさまざまな社会貢献活動を行ってきました。近年、企業の社会貢献の重要性が高まっていることを踏まえて、2013年に社会貢献活動基本方針と重要課題を策定しました。

これをもとに、さまざまな社会的な課題の解決に向けてアルバックグループが保有する技術や人材を有効活用し、社会貢献活動を推進することで、地域社会及びグローバル社会に貢献していきます。

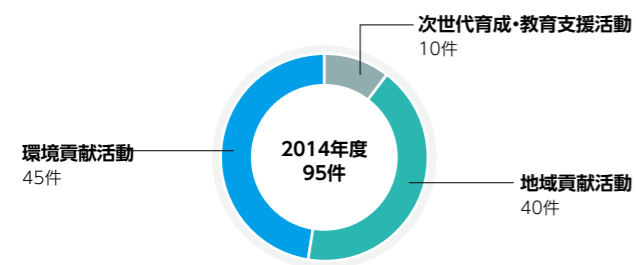
### 社会貢献活動基本方針

「独創的な先端技術を持って産業と科学の発展に貢献する」という経営理念のもと、独創的な技術や世界に提供するとともに、アルバックグループが保有する技術や人材を活かし、社会のさまざまな課題を解決するための活動を行っています。

### 重点課題



### アルバックグループ社会貢献活動実績(2014年度)



### 地域イベントへのボランティア参加 ((株)アルバック、アルバック九州(株)、アルバックテクノ(株))

活動事例紹介  
1

2015年3月、アルバック九州(株)をはじめとするアルバックグループは、鹿児島県霧島市横川町で開催された「第14回山ヶ野ウォーキング大会」にボランティアスタッフとして参加しました。ウォーキング環境の整備やテント・案内看板の設置、当日は参加者へのコース誘導や要所での史跡紹介などを行いました。15名のスタッフが参加し、山ヶ野金山の名残を感じさせる史跡を巡りながら、その歴史を参加者に伝えています。



第14回山ヶ野ウォーキング大会にボランティアスタッフとして参加

### ペットボトルキャップ収集活動 ((株)アルバック)

活動事例紹介  
2

(株)アルバックは、ペットボトルキャップの回収活動を2007年から行っています。NPO法人「世界の子供にワクチン」を日本委員会(JCV)を通し、ワクチンとして世界の子どもたちに寄付されました。集めたペットボトルキャップは累計2,173kgとなり、ポリオワクチンに換算すると1,738人分となります。



継続的な活動が評価されて、NPO法人「Reライフスタイル」より頂いた表彰状

### 服の寄贈活動 (ULVAC TAIWAN INC.)

活動事例紹介  
3

2015年3月、ULVAC TAIWAN INC.は、自立生活を支援する康寧教養院のお年寄りや、低所得者、障がい者の皆様へ、社員の服を全部で8箱寄贈し、感謝状をいただきました。



康寧教養院への寄付活動(台湾)と感謝状(右)

# コーポレート・ガバナンス

アルバックグループは、コーポレート・ガバナンスを企業倫理及び法令遵守を徹底させつつ競争力のある効率的な経営を行うことと捉えています。持続的な成長、中長期的な企業価値の向上につながるものと考えており、社会並びに株主の皆様に対する企業責任遂行のための最重要経営課題の一つと認識しています。

## アルバックの経営管理体制

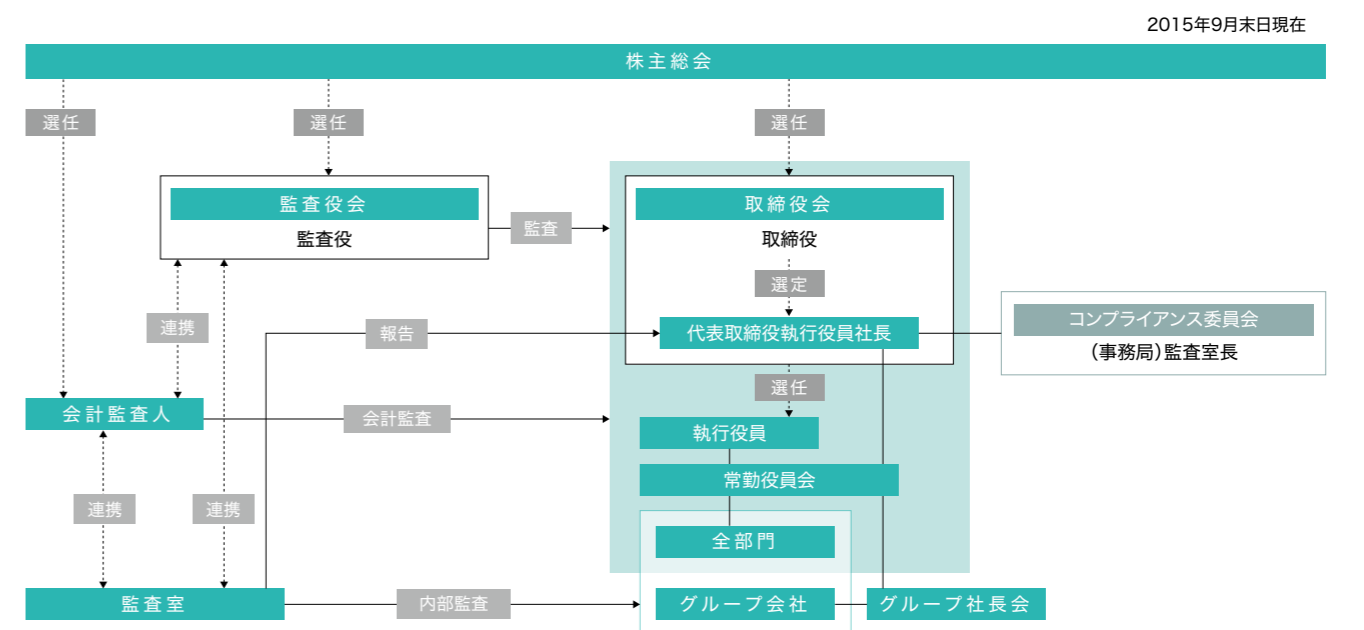
経営上特に重要な事項についての合議機関として取締役会を設置し、毎月1回の頻度で定時開催を行うとともに、機動性確保の観点から必要に応じて臨時開催を実施しています。この取締役会は8名から構成されており、うち3名を社外取締役としています。また、社外取締役のうち1名は、独立社外取締役として選定しています。

また、監査、監督の充実という観点から、経営判断及び業務執行の監督機関として監査役会を設置しています。この監査役会は、4名から構成されており、うち2名を社外監査役としています。また、社外監査役のうち1名は、独立社外監査役として選定しております。これにより、監査役会においては、その半数が社外監査役で構成され、さらに独立社外監査役も就任していることから、十分に厳正かつ公正中立で透明性が確保された監査、監督機能の拡充に配慮できています。

## 業務執行体制

アルバックは、取締役会における判断を補完しつつ迅速かつ効率的な業務執行の実現を目的とする機関として常勤役員会を設置し、毎月2回の頻度で定時開催を行うとともに、機動性確保の観点から必要に応じて臨時開催を実施しています。この常勤役員会は常勤取締役及び執行役員計18名より構成されています。これにより、経営上重要な事項についての慎重な審議及び判断と業務執行の迅速化を両立する機動的な業務執行体制を実現しています。また、同時に、監督機能の観点から、各取締役及び執行役員の責任と権限を明確化することによる相互牽制、そして社外取締役による公正な観点からのチェックも実施しています。

### 経営管理体制



# 役員一覽 (2015年9月末)

## 取締役



代表取締役  
執行役員社長  
小日向 久治



取締役  
執行役員副社長  
坊 昭範



取締役  
専務執行役員  
本吉 光



取締役  
専務執行役員  
末代 政輔



取締役  
常務執行役員  
小田木 秀幸



取締役 (社外)  
御林 彰



取締役 (社外)  
池田 修三



取締役 (社外)  
内田 憲男

## 監査役



監査役  
高橋 誠一



監査役  
伊藤 誠

## 執行役員



専務執行役員  
岩下 節生



専務執行役員  
山元 正年



常務執行役員  
中村 孝男



常務執行役員  
白 忠烈



常務執行役員  
藤山 潤樹



執行役員  
平野 裕之



執行役員  
齋藤 一也



執行役員  
梅田 彰



執行役員  
松本 亮



執行役員  
大日向 陽一



執行役員  
柳澤 清和



執行役員  
佐藤 重光



執行役員  
蔡 有哲



監査役 (社外)  
浅田 千秋



監査役 (社外)  
大塚 一実

# コンプライアンス

アルバックグループは、より徹底した法令遵守体制を推進するため「コンプライアンス規程」及びその関連諸規定を定めて体系化しています。この規定体系に従って、コンプライアンス委員会の運営や内部通報制度の運用といった体制が整備され、法令遵守の精神を社内に定着させるよう継続的に活動しています。

## 企業倫理行動基準の制定

アルバックは、18項目からなる社員一人ひとりの行動規範を示した「企業倫理行動基準」を制定し、内容説明を行った上で、小冊子化したものを配布しています。社員一人ひとりが、これを企業人としての法令遵守精神の証とできるようにしています。

## 内部通報制度による法令遵守

アルバックは、法令違反などによって生じる影響を最小限に留めるため、内部通報制度を整備しています。内部通報制度の窓口は、コンプライアンスの社内調査機関であるコンプライアンス委員会の事務局を務める監査室が担当しています。この内部通報制度を利用しやすくすることを目的として、同室の活動の独立性を確保するとともに、匿名による通報も認めています。さらに、この社内調査の公正性を担保しつつ、慎重な審議を行うために、コンプライアンス委員会の構成員を、社長と各

組織の長とし、厳格な守秘義務を自ら課した上で、通報者や調査関係者に対して不利益な取り扱いがなされないような運用をしています。この観点から、社内調査は、慎重に行われており、社内外を問わず多くのヒアリングを行うとともに、特に専門性が要される事案では、弁護士などが同席して行うものとしています。

## 違反行為への対応

コンプライアンス委員会で調査案件について審議した結果、法令や社内規則への違背事実が認められた場合、速やかに該当違背行為の中止措置を実行します。そして、違背行為に関連した者についての処分を指示するとともに、特に重大な違背行為に対しては、懲戒委員会の審議を経てかかるべき処分を決定します。さらに、違背行為が起きた根源的な原因まで検討を行い、より実効的な再発防止策を講じるよう努めています。

## CSR社員意識調査結果を受けて

アルバックでは、毎年ステークホルダーに対する取り組みの目標を掲げ、CSR活動を推進しています。2014年度は、CSR社員意識調査において、従来の従業員自身のCSR意識の向上を中心とした調査から、それぞれの具体的な目標や活動をステークホルダーの一つである従業員にも情報発信し、理解を深めると同時に、従業員の声を取り入れながら各種の取り組みの品質向上（PDCAサイクル）を目的として、設問を一新しました。

2014年度は3月16日から4月10日に従業員1,259人に対して本調査を行い、642件の回収となりました（回収率51.0%）。

今回は新しい項目での調査初回でしたので、この結果を

ベースラインとして各活動へフィードバックを行い、今後のCSR活動の品質向上に向けて取り組んでいきます。

なお、特に従業員からの期待度が高かった上位5項目は、以下の通りです。今後さらに力を入れて取り組みを進めていきます。

### 期待の大きかった上位5項目：期待している(%)

- 「安全な職場づくり」：67.5%
- 「お客様への安全・安心の提供」：65.8%
- 「アルバックブランドの品質安定供給」：61.7%
- 「環境負荷を低減する製品開発を推進」：61.3%
- 「社員の健康リスクの低減」：60.8%

# リスクマネジメント

アルバックグループは、複雑多様化するリスク要因に対して、識別・分類・分析・評価を通じて適切かつ迅速な対応がとれる体制を拡充しています。このリスクマネジメント体制を戦略的経営と有機的に結びつけることで、より一層の企業価値向上を図っています。

## リスクマネジメント体制構築への取り組み

### —— グループ共通規定によるリスク対応体制の強化

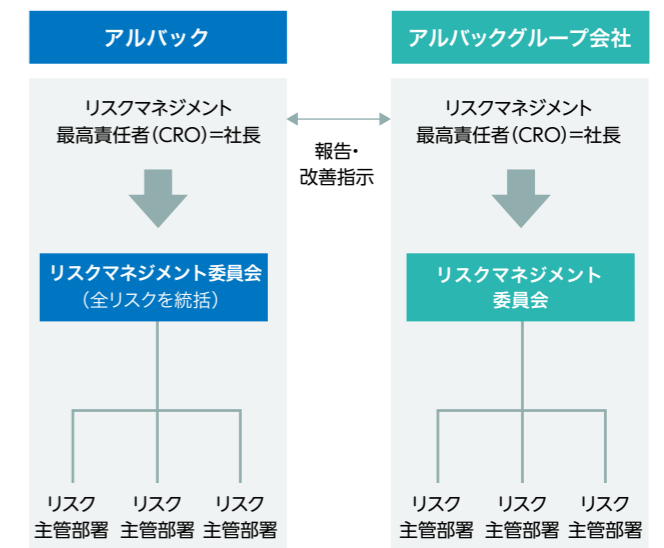
アルバックグループは、リスクマネジメント体制の拡充を重要経営課題と認識しています。そこで、アルバックグループ共通規定として「アルバックグループ・リスクマネジメント規程」を制定し、グループ各社の社長がそれぞれ最高責任者の任に就き、さまざまなリスクに関する情報を関係部署と共有しています。

さらに、重要事項については、グループ各社の社長からアルバックの社長にまで速やかに情報が伝わる体制にしています。

## リスクマネジメント体制

アルバックは、広範なリスクを分類し、それぞれのリスクに対して主管部署を設置しています。この主管部署は、インフォメーションセンターとして、関係部署を取りまとめて具体的なリスクの洗い出しを行い、評価をしています。そして、情報を恒常的に収集して適切にリスク対応するとともに、問題点の察知も行っています。特にこの評価作業において重要と判断されたリスク情報については、円滑な情報の収集ができるように継続的活動を行い、緊急時には迅速に対応できるように特に配慮しています。その上で、このリスクマネジメント体制の検証の観点から、社長が委員長となり、リスク主管部署によって構成されているリスクマネジメント委員会をリスクマネジメント統括組織として年2回定時開催し、全社的な基本方針の決定や管理運営状況の把握と改善に取り組んでいます。

### ■ リスクマネジメント体制



- リスクごとに主管部署を設定し、PDCAによるリスクマネジメントを行っています。
- グループ会社においては、各社の規模などを勘案して、リスクマネジメント委員会の設置の要否を判断しています。

# CSRの活動実績と目標一覧

アルバックグループは、「独創的な先端技術を持って産業と科学の発展に貢献する」という経営理念の下、独創的な技術を世界中に提供するとともに、アルバックが保有する技術や人材を活かし、社会のさまざまな課題を解決するための活動を行ってまいります。

ステークホルダー	コミュニケーションガイドライン	2014年度の目標
お客様	お客様との信頼関係を重要視し、品質・安全性の向上に取り組んでいます。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ISO9000/14001のグローバル統合認証(Phase1)を確実に実施する。</li> <li>●フロントローディングに沿った品質検査を定着させる。</li> </ul>
お取引先	適正かつ公正・公平な取引関係を維持促進し、相互に確かな信頼関係を築けるよう努めています。	事業部の構想設計段階におけるデザインレビューに参画し、前工程におけるコストダウンによりアルバック・グループ連結コストを削減する。(購入品8.0%の継続 製作品 各事業部へのコストダウン提案)
株主・投資家	企業活動や財務情報の迅速な開示に努め、株主・投資家の皆様と積極的なコミュニケーションに取り組んでいます。	コーポレートコミュニケーションを推進するとともに、中期経営計画の進捗に関する情報開示を継続的に行う。
従業員	多種多様な働き方をしながら安心して快適に働ける職場づくりに取り組んでいます。	CSR意識調査項目の見直しを行う。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>●人事ローテーションや組織再編に向け、全社的なヒアリングを実施する。</li> <li>●技術者に対する研修体系を整え、確実なスキル習得をめざす。</li> <li>●医療指導対象者への面談などの対応を継続し、さらなる健康リスクの低減を図る。</li> <li>●ストレスチェックの法制化を視野に入れ、不調者の早期対応と職場改善が達成できるチェック体制を作り展開する。</li> <li>●メンタルヘルス研修を通じて、職場のコミュニケーション活性化とモチベーションの向上を図る。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>●グループ共通の教育プログラムを整備する。</li> <li>●個々の社員をつなぐグループ共通のものづくりに対する価値観を整理し、アルバックで働くことの魅力をグループ社員全体で共有する。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>①アルバックグループの労働災害発生件数について、前年度より半減を目指す。</li> <li>②アルバックグループの製品事故発生件数について、前年度から継続して低い水準を維持する。</li> </ul>
環境	地球環境の保全を人類共通の課題の一つととらえ、環境に配慮した事業活動に取り組んでいます。	環境負荷を低減するための製品の開発を引き続き推進する。 例) <ul style="list-style-type: none"> <li>●消費エネルギー量が少ない製品</li> <li>●資源投入量が少ない製品</li> <li>●製品含有化学物質規制に対応する製品</li> </ul>
		アルバックグループで2013年度に対して5年間で10%のエネルギー使用量の削減を行う。  田んぼプロジェクトでは新たに茅ヶ崎の田んぼの生き物を紹介するアルバックの田んぼ自然図鑑の作成を行う。
地域社会	各国・各地域の習慣・文化に根ざした社会貢献活動に取り組んでいます。	アルバックグループ各社に対し、取り組みを紹介し活動を推進していく。

◎計画以上成果を達成 ○「達成」及び「予定通り進捗」 △努力を要する ×さらなる努力を要する

2014年度の実績	2014年度自己評価	2015年度の目標	参照ページ
<ul style="list-style-type: none"> <li>●ISO9000/14001のグローバル統合認証(Phase1)を完了した。</li> <li>●フロントローディングの施策として6段階のデザインレビューを展開し、追加コストの抑制に寄与した。</li> </ul>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ISO9000/14001のグローバル統合認証(Phase2)を確実に実施する。</li> <li>●グローバルマネージメントレビューによる品質改善事項のグループ間展開の推進。</li> <li>●フロントローディングのグループ展開推進。</li> <li>●アルバックグループの製品事故発生件数について、前年度より半減を目指す。</li> </ul>	P27
デザインレビュー・コストダウン会議を通じたコストダウン実績 購入品:6.5% 製作品:6.0% (アルバック+アルバック東北(株)+アルバック九州(株))	△	<ul style="list-style-type: none"> <li>●サプライヤーのBCP調査の継続</li> <li>●紛争鉱物問題への対応</li> <li>-CFS認証取得の検討</li> <li>●サプライヤーとの定期的な情報交換</li> <li>-サプライヤー会の内容充実</li> <li>-主要サプライヤーの個別訪問</li> </ul>	P28
機関投資家向けにミーティングを129件実施、技術セミナーを2回開催した。 また、会社紹介動画を作成し、社内外のコミュニケーションの推進に努めた。	○	機関投資家との対話を、昨年度より多く設けるよう努めるとともに技術セミナーなどの情報発信を推進する。	-
CSR目標に基づき、全面的に質問項目を見直した。	○	CSR意識調査結果を、各部署にフィードバックし取り組みに反映していく。	P43
<ul style="list-style-type: none"> <li>①部署長ヒアリングを踏まえ人事ローテーションを行った。</li> <li>②技術者教育の体系を整え、各職種での講座を実施した。</li> <li>③健康リスクの高い医療指導対象者への対応実績100%であった。</li> <li>④メンタルチェック有所見者への面談対応実績100%であった。ストレスチェックの法制化(2015年12月施行)に対応した設問となるよう改定を行った。</li> <li>⑤管理職を対象としたラインケア教育、全社員を対象としたセルフケア教育を実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①○</li> <li>②○</li> <li>③◎</li> <li>④◎</li> <li>⑤△</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●人事関連の意見集約・情報共有(制度・採用・教育)のため、ヒアリングを継続する。</li> <li>●次世代リーダー育成を進める。</li> <li>●健康リスク低減のため、アルバック健康保険組合と協働して重症化予防に向けた活動を行う。</li> <li>●ストレスチェックの結果を活用し、組織活性化を目的とした活動を推進する。</li> </ul>	P29-31
<ul style="list-style-type: none"> <li>●各社独自の教育コンテンツの共有化完了。</li> <li>●グループ含めた生産関係専門教育の体系化と指導者育成を企画、実行するため、2015年度より生産本部内に「教育センター」を新設。</li> <li>●グループ活性化の取り組みとして、グローバル生産技術報告会、グローバル業務改善報告会、Skill Challengeのプログラムにて、改善活動と成果を共有、高めあう意識付けの仕掛けを企画し、実行した。</li> </ul>	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>●製造Pro教育のカリキュラムを体系化し、指導者育成を開始する。</li> <li>●グローバル生産技術報告会、グローバル業務改善報告会、Skill Challengeによるグローバル報告会を継続し、ものづくりや技術に対する取り組みや考え方や成果をグループ間で共有し、交流をより活性化させる。</li> </ul>	P35-38
<ul style="list-style-type: none"> <li>①アルバックグループの労働災害発生件数は、前年度より僅かに増加したが、休業労働発生件数は減少した。</li> <li>②アルバックグループの製品事故発生件数は、前年度同等と低い水準を維持している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①△</li> <li>②○</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①アルバックグループの労働災害発生件数について、前年度より半減を目指す。</li> <li>※製品安全に関する目標については、本年度よりお客様の項へ移行する。</li> </ul>	P32
オリジナル製品を持つ会社/事業部門は新たな環境製品創出のための活動を進めた。	◎	環境負荷を低減するための製品の開発を引き続き推進する。 例) <ul style="list-style-type: none"> <li>●消費エネルギー量が少ない製品</li> <li>●資源投入量が少ない製品</li> <li>●製品含有化学物質規制に対応する製品</li> </ul>	
グループ各社にエネルギー管理体制(組織)を立ち上げ、アルバックグループの省エネマニュアルを元に各社のエネルギー使用状況の分析を行った。今後は、分析により省エネを行うポイントを定め省エネを進めていく。	◎	引き続きアルバックグループで2013年度に対して5年間で10%のエネルギー使用量の削減を行う。	P33-34 P39
前年度に引き続き、アルバックの田んぼ周辺の生物図鑑を作成した。	◎	田んぼプロジェクトでは新たに茅ヶ崎の田んぼの生き物を紹介するアルバックの田んぼ自然図鑑の作成を引き続き進める。茅ヶ崎市の自然とアルバックの田んぼプロジェクトの共生を考える流れを作る。	
社内報、アルバックレポート、SNSなどを通じて、社内外へアルバックの社会貢献活動を紹介した。	△	アルバックグループ会社の社会貢献活動に対する理解を深めるよう、取り組みを引き続き紹介し、活動を推進していく。	P39